

42480

教科書文庫

4
810
42-1941
200030 2122

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

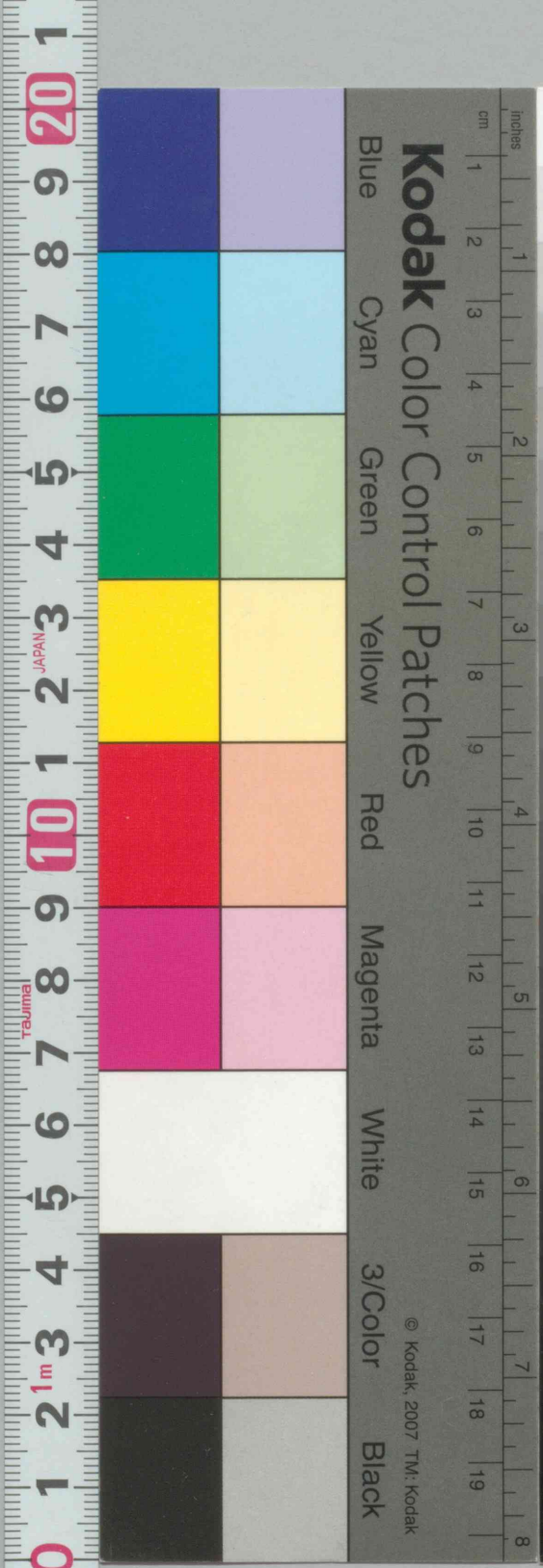


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
Om15
資料室

子新國語

卷一



371.9
Om15

資 料 室

京都帝國大學
教授文學博士 澤瀉久孝
奈良女子高等
師範學校教授 木枝增一
共編

女子新國語讀本

新制版



文部省檢定濟

昭和十六年七月三十日
高等女學校國語科用

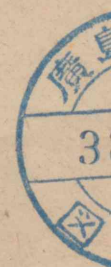
廣島大學
醫學部
圖書印

廣島大學
教
38035
圖



(照 參 課 六 第)

士 富 の 曉



編纂の趣意

本書は、昭和十二年三月二十七日改正發布せられたる高等女學校國語科教授要
目に則り、左の諸點に留意して編纂しました。

- 一 國民精神の體得——これに就いては、國體の精華、國民の美風偉人の言行を敍し、特に日本女子としての特性を養ふに足る材料を選定しました。
- 二 文學精神の涵養——これに就いては、國文學の本質に基づき、時に於ては古今、形に於ては様式の種々相に互り、心情を優雅ならしむべき材料を選定しました。
- 三 國語精神の把握——これに就いては、各教材が總べて醇正なる國語に採つてあるのは勿論、更に國語の正しい相を認識せしむると同時に、國語愛護の念を培ふに足る特別なる材料を選定しました。

右三點の外、世界の情勢を知らしめて圓滿なる國民的常識を養成するに足るもの、女子の本務たる家庭生活の趣味を向上せしめるに足るものをも加へました。

昭和十二年七月

木 枝 増 一
澤 瀧 久 孝

目次 卷一

一	希望の春	編者	一
二	天の愛子	徳富蘆花	六
三	われら日本を愛す	中勘助	一〇
四	言葉の愛	島崎藤村	三
五	自國語	上田萬年	七
六	曙の富士	小泉八雲	三
七	伊勢參宮	五十嵐力	四
八	新緑	萩原井泉水	三
九	犬ころ	長谷川二葉亭	六
一〇	二つの世界	小川未明	五
一一	飼ひもの	野上彌生子	六

三	涼み臺	吉村冬彦	七
三	七夕祭	吉田絃二郎	八
四	良寛さま	相馬御風	八
五	文筆	編者	九
六	なぎさ	山村暮鳥	一〇
七	現代短歌抄	中邨秋香	一四
八	歌話	中邨秋香	一四
九	汝の母	姉崎嘲風	一六
一〇	空の紀行	大佛次郎	一六
一一	秋の小天使	薄田泣菫	一六
一二	萩の原	若山牧水	一七
一三	用水	遺老物語	一七
一四	百年の計	駿臺雑話	一七

附録
 國語假名遣表
 常用漢字表
 略字表
 國字表

……終……



女子新國語讀本 新制版 卷一

一 希望の春 編者

わけても
 やうに
 おる
 よう
 爛漫と
 瑞々しい
 やはらかい

春が來ました。年毎に變らず來る春ながら、今年の春はわけても新しい姿でやつて來たやうに思はれます。野にも山にも充ち満ちてゐる春の生氣が、希望と力とを新しく私達に與へようとしてゐます。霞の奥から流れて來るかゝやかしい春の光、爛漫と咲きこぼれてゐる櫻花の色は、やくも瑞々しい緑をやはらかい

さては
ほがらかに
象徴する
象(家)

反省
自覺

入らう
をり
洋々たる

春風になびかせてゐる柳の絲、さては、ほがらかに聞えて来る雲雀の歌聲、何一つとして若い私達の心を象徴してゐないものは無いやうに思はれます。

丁度この時、私達は新しく女學生としての第一歩を踏出しました。何といふ喜ばしいことでせう。併し、私達はその喜に對して十分なる反省と自覺とがなければなりません。私達は今や女學生としての大切な出發點に立つてゐると共に、日本婦人としての重要な修養期に入らうとしてをります。私達は洋々たる前途に對して、勇ましく、力強く歩み出さなければなりません。

肇國
肇(事)
はぐくむ
無比
無(火)
繼承者
創造者
創(刀・刀)
金甌無缺
金(金)
體得する
萬邦
照破する
承ける
承(手)
使命
重且大

私達は日本國民であります。上に萬世一系の天皇を戴き、肇國以來の光輝ある歴史にはぐくまれて来た日本帝國の臣民であります。私達はこの世界無比の帝國の繼承者であると共に、又、これに新しき生命を與へる新日本の創造者でなければなりません。金甌無缺の尊い國體の精神を體得して、萬邦を照破する日本精神に一段の光を添へなければなりません。舊きを承けて新しく生かすところに新日本國民の使命があるのです。これこそは實に父祖が偉業をなしとげた唯一の道でありました。又、私達が日本國民として生きる唯一の道であります。私達の責務は重且大と言

はなければなりません。

私達は又日本女性であります。女性には女性として與へられた天賦の道があります。この天賦の道が日本精神に磨かれて光を發したものが日本の婦徳です。これは時勢の推移と變遷とに應じて、その現れに多少の相違がありましても、その根本精神は少しも變らず生きて來ました。新しい婦徳とは輕薄な西洋かぶれを言ふものではありません。日本獨得の婦徳を新しく生かして行く事であります。私達が日本國民として生きるのは、この日本女性としての婦徳を通してでなければなりません。私達には十分の覺悟が必要

天賦の道
天(大)

推移

輕薄な
西洋かぶれ
獨得

であります。

日本は今や友邦滿洲帝國との親善交誼日にあつく、東洋永遠の平和の指導者を以て任ずると共に、世界に向かつて廣く昭和新中国の國光を仰がせるに至りました。將來日本の育成者たるべき私達としても、安易な心持で勉強してゐる譯にはいかなくなりませんでした。同時に又、ますます、勉強のしほえがある譯であります。楽しい春、楽しい女學生生活希望に満ちた昭和の大御代。私達はこの洋々たる前途に向かつて、若々しい元氣と力とを籠めて、しつかりした足どりで進んで行くかうではありませんか。

友邦
友(又)

親善交誼
親(見)交(上)

：を以て任ずる

安易な
易(日)

しほえ

足どり

徳富蘆花

名は健次郎、熊本縣の人、小説家、昭和二年（一九一七）歿、年六十。

己惚
皇天
秘藏子

意匠
意（心）

勿體ない

二天の愛子

徳富蘆花

日本に生まれたことを感謝する。

どう思ひ直しても己惚ではなかつた。事實である。

日本は皇天の秘藏子だ。

世界の地理・歴史から日本の地理・歴史に返つて見れば見るほど、私は天の意匠の指痕を鮮に讀む。世界のために日本を育てるため、天はどれほど面倒を見たことか。父の嚴母の慈、あらゆる手を盡くして、日本は今日まで育てられた。勿體ない大御親の心盡くしに、私は感激せずには居られぬ。否でも應でも、日本は天の

愛子だ。

世界地圖に見る日本の小ささよ。小さいが當然。

種子は小さい、核は小さい、要かまは小さい。私は嘗て歌つた。

日輪は見る目に小なれど光世界を照らす。

日本は地圖に小なれど志は四海を懐く。

世界の何處に「日」を旗章にする國があるか。自ら日本と名のつた時に、「日」を旗章と定めた日に、日本の位置と天職は疾くに定まつてゐた。

世間見ずであつてはならない。だから、明治維新の

核
核（木・六畫）
要
嘗（日）

名のる
疾くに
世間見ず

初め、大いに知識を世界に求めたのだ。日本は日本の貧しさを知つて居る。古今東西、優秀なものが日本に乏しくて、他の兄弟にあつた。併し日本はそれを取り入れた。また、とり入れようとして居る。

私は日本の病を知つて居る。併し、私は失望せぬ。日本を支配するものは瑞々しい生命だ。日本の衷に火が燃える。嘗て富士を一夜に聳えさせ、今も阿蘇、淺間を煙らす火、恒に新たな創造の火、その火が日本の衷に燃える。日本が身慄ひして起つ時、凡百の病は日の前の夜のやうに逃れる。

私は日本の若さを知る。日本は若い、きまりがわる

凡百

豫言
(家)

太平洋を中にして
徳富蘆花著、主として日本と諸外國との國際關係を中心にした感想文集める、大正十三年(一九二四年)九月刊行。

いほど若く幼い。二千何百年の歴史を脱いで明治維新に生まれ返つて、やつと半世紀過ぎたばかりだ。若いのが當然だ。若いのが生命だ。生命は成長する。私は日本の前途を信ずる。

應ずるものへの豫言、著くものための座、負ふもの、の使命、自覺だ。日本は潔く定められた天の愛子の座に著く。

(太平洋を中にして)

中 勘助
東京市の人、文學者、明治十八年三月四日生。

三 われら日本を愛す

中 勘助

ああ日本、
われら日本を愛す。
そは東天にのぼる太陽なり。
光なり、
力なり、
命なり。
さしのぼる太陽をなにものか空にとゞめ得る

機之音

中勘助著、詩集、詩五十篇を集める、昭和十一年(一九三六)五月刊行。

ああ日本、
われらが國、
われらが祖先の國、
われら日本を愛す。
そは東天にのぼる太陽なり。
光なり、
力なり、
命なり。
さしのぼる太陽をなにものか空にとゞめ得る。

(機之音)

島崎藤村

名は春樹、長野縣
の人、小説家、詩
人、明治五年（西
三）生。

四言葉の愛

島崎藤村

一言葉の愛

「父さん。」

と、太郎が側へ来て、外國ではどんな言葉を話すかと尋ねるものですから、

「そりや佛蘭西では佛蘭西語さ、英吉利へ行けば英語を話すやうに。」

と、父さんが言つて聞かせました。

「子供でも？」

と、また太郎が尋ねました。

肴（肉）

太郎よ。佛蘭西では、お肴屋さんでも、八百屋さんでも、みんな佛蘭西語です。鉛筆一本買ひに行くにも、日本の言葉では通じません。「今日は」なんて言つたつて誰も解るものが有りません。

思ふさま
つくづく

さういふ遠い國へ行くと、自分の國の言葉が戀ひしくなります。かうしてお前達に話すやうな國の言葉が思ふさま使つて見たくくなります。國の言葉で書いた本が讀みたくくなります。父さんは外國に暮して見て、つくづく日本の言葉の有難味を知りました。お前達は幼なごころにも、言葉を愛することを知つて、そして、勉強したら、どんなに仕合はせだらう。（藤村讀本二）

幼なごころ

二 ふるさとの言葉

山や林は父さんのふるさとですとお前達にお話し
ましたらう。山や林ばかりでなく言葉も父さんには
ふるさとです。邊鄙な山の中の村ですから言葉のな
まりも鄙びては居ますが人の名前の呼方からして馬
籠は馬籠らしいところがあります。たとへば末子の
やうなちひさな女の子を呼ぶにも、

「末さま。」

と言つたりもつと親しい間柄で呼ぶ時には、

「末さ。」

と言つたりしまして鄙びた言葉の中にも何處か優し

邊鄙な
なまり
鄙びる
鄙(下右)・邑
馬籠
長野縣西筑摩郡神
坂村、藤村の生ま
れ故郷。
ちひさな

いところが無いでもありません。

父さんの田舎には、どうねきなどといふ言葉もあり
ます。もう仕末におへない様な人のことを「どうねき」
と言ひます。こんな言葉は木曾にだけあつて、他の土
地には無いのだらうかと思ひます。それから、「わやく」
といふやうな言葉もあります。「いたづらな子供」とい
ふところを「わやくな子供」と言ひます。ふるさと
の言葉は戀ひしい。それを聞くと、父さんは自分の子
供の時分に歸つて行くやうな氣がします。お前達の
祖父さんでも、祖母さんでも、みんなその言葉の中に生
きていらつしやるやうな氣がします。

(藤村讀本三)

おへない

いらつしやる

生馬の眼を抜くくらゐ。

三 東京の言葉

吉村のお婆さんや小母さんはよく父さんに言ひました。東京は生馬の眼でも抜かうといふくらゐのすばしこいところですよ。愚圖々々して居ては駄目ですよ。第一、都會の人は物の言方からして違ひますよ、と。

ある時、小母さんはこんな風に東京の言葉といふものを父さんに説明してくれました。

「そりや、東京の人の話は『何』だけで通りますからね。

『ちよいと、あの何を何して下さいな。』——『あの何ですか。』——それでお前さん、話がもうちやんと解つてしまふんですからね。」

(藤村讀本三)

藤村讀本

島崎藤村著、六卷、少年期から青年期に移り變る頃の人の爲に編まれたもの、大正十五年(二五六)二月刊行。

上田萬年

名古屋市の人、國語學者、文學博士、昭和十二年(二五七)年七月。

五 自國語

上田 萬年

自國語 恰も 同胞 譬ふれば 精神的血液 國體 人種 維持す 標識

言語は之を話す人民に取りては、恰も其の血液が肉體上の同胞を示すが如く、精神上の同胞を示すものにして、之を物に譬ふれば、日本語は日本人の精神的血液なり。と言ふを得べし。日本の國體と日本人種と、實に此の精神的血液を以て維持せられ、結合せらる。

言語は其の國民の標識となるのみならず、之と同時に、又一種の教育者即ち情深き母ともなるなり。我等の生まるゝや、此の母は我等を其の膝の上に迎へ取り、懇に國民的思想と國民的感動とを教ふるなり。され

ば、此の母の慈愛は誠に天日の如しと言ふべきなり。苟も此の國に生まれ此の國民たり此の國民の子孫たる者は、誰か此の光を仰がざるべき。

言ひつべし
終日
頭是なし
頑(頁)
嚴し
嚴(口)
紫雲英

言語には、我等が心中に一日も忘れかぬる生活、殊に人生の神代とも言ひつべき小兒の頃の記念が結合せられ居るものと知るべし。我等が幼かりし頃、終日の遊に疲れ果てて、すや／＼と眠に就かんとする折、母君は如何に優しき聲にて「寢よ」との歌を歌ひ給ひしか。頑是なき子供心にわるふざけなどして遊び廻れる時、嚴しき父君は如何に嚴に教訓を垂れ給ひしか。さては、春の麗かなる野邊に友達と紫雲英などを摘歩き、或

餘念なし

反映す
反(又)
恩澤
恩(心)

は、秋の日赤き垣根の下に餘念なく栗の實を拾ひし其の當時より用ひ來れる言語は、當時の人名、當時の地名と共に、えも言はれぬ快感を我等に與ふるなり。次には小・中學校の言葉、次には學生の言葉、或は市民としての言葉、或は職業により階級により地方によりての言葉など、皆それ／＼の生活を其の上に反映す。故に、外國にて人となりしか、或は外國人の學校にて外國語の教育のみ受けたる人ならざる限は、此の言語の恩澤を蒙り、此の言語に感謝の意を表せざる者はなかるべし。されば、國民が其の國の言語を尊ぶことは一の美德にして、偉大なる國民は必ず其の自國語を尊び、決して

措情理

葛にす
須臾
須臾
須臾

國語のため
二册、上田萬年著
國語に就いての種
種の研究論文をあ
つめたもの、第一
册は明治二十八年
（三五五）六月、第二
册は明治三十六年
（三五六）六月刊行。

之を措きて他の國語を尊崇せず。情の上より自國語を愛し、理の上より其の保護改良に従事し、以て眞正の國民を養成せんことを力む。凡そ何れの國を問はず、苟も國家的觀念の上より、其の國民の一員たるに愧ぢざる人物の養成を以て目的とする以上は、先づ其の國の言語次に其の國の歴史、此の二つを蔑にしては決して效を收むること能はず。これ國民たる者の須臾も忘るべからざることなり。

（國語のため）

小泉八雲

ラフカディオ・ヘルン、元英國人、ギリシヤのリユカデイヤに生まれた、明治二十三年（三五〇）來朝、後日本に歸化、明治三十七年（三五四）歿、年五十五。
透きとほる
紫紺色
異郷
異（田・七畫）
徐除
富士
富士山、山梨・静岡兩縣に跨がる、海拔三七七八米。
又なく
うるはしい
微徴

六曙の富士

小泉 八雲

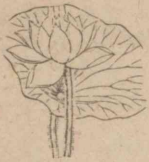
日の出の少し前、曇りない四月の朝の透きとほる暗さをすかして、彼は再び故國の山を見た。黒い海の上に、紫紺色に聳え立つ遠く高い山嶺を見た。彼を長い異郷の旅から連歸つて來るこの汽船の後の方は、水平線が徐々に薔薇色の光で染められてゐた。甲板の上には、もう若干の外人が、太平洋上の富士の又なくうるはしい初姿を見ようと待構へてゐた。彼等は山脈の長いうねりを見つめた。そのぎざぎざした輪廓の向かふにはまだ星が微に瞬いてゐる。

——富士は見えない。

一人の船員は問はれて答へた。

「あゝ、あなた方は眼のつけ所が低過ぎます。もつと上を御覽なさい。もつと高い所を。」

彼等は空の眞中近くまで眼を上げた。すると、曙の色で幻の蓮華の如く薄紅に染まつた偉大な山頂が見えた。その壯觀に打たれて彼等は沈黙してしまつた。忽ち、萬年の雪は金色に變り、やがて、白色になつた。太陽の光が地平線を飛越し、暗い山脈を飛越し、一見しては星の上までも飛越して、富士の頂を照らしたのであつた。



幻一幼
蓮華

一見する

精

情緒

情(心)

漠然と

節奏

節(竹・九畫)

小泉八雲全集

小泉八雲の英文の著作を翻譯したものの、全十八卷、大正十五年(一九二六)七月一昭和三年(一九一八)一月刊行。

やがて夜は全く明けはなれた。柔かな青い光は天空に漲り、總べての色彩は眠から覺めた。人々の眼前には、横濱の明かるい港が開けてゐた。さうして、麓は見えぬ神々しい峯が、雪の精のやうに大空に高く懸つてゐた。

異國にさすらつて來た彼の耳には、あゝ、眼のつけ所が低過ぎる。もつと上を御覽なさい。もつと高い所を。といふ聲がまだ響いてゐた。さうして、むく／＼と押上げて來る情緒とともに漠然とした節奏をなしてゐるのであつた。

(小泉八雲全集に據る)

五十嵐 力

山形縣の人、國文學者、文學博士、早稻田大學教授、明治七年(二三三四)生。

山田

宇治山田市の中。

拜(手)

神々しさ

畏(さ)

五十鈴川

御裳瀧川、伊勢の大神宮の神域を流れる。

嗽(ぐ)

幹(干) 千木、堅魚木

七伊勢參宮

五十嵐 力

俄に參宮を思ひ立ち、昨夜八時に東京を發つて、今朝の十時に山田に着きました。まづ外宮を拜んで、次に内宮を拜みました。兩宮の神々しさ、殊に内宮の畏さは言語に盡くせません。五十鈴川の清い流に水底の小鮎の數を讀みつゝ、恭しく嗽いで、それから、名も知らぬ鳥が、頭上の木の間に飛移つては、奥深く啼く音に耳を澄ましつゝ、緑青色の苔にさびた神杉の太い幹が、天を支へる柱の様に立並んでゐる間を辿つて、暫く進むと、やがて木立の奥、塀の彼方に、千木、堅魚木の金色が拜

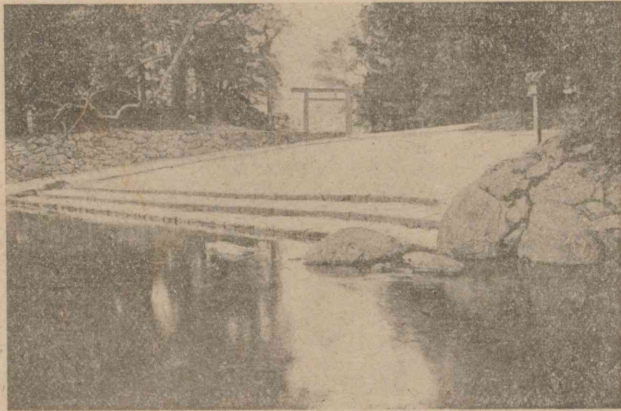


曳(日)

御白石

跪(足)

拍手



五 十 鈴 川

まれます。更に進んで塀の内に入ると、正面の御門には白布の垂幕が長く地に曳いて、靜かにそよ風に揺られて、その奥に、疎に立つた神杉に護られて、御白石のびつしりと敷きつめられた間に、神々しい白木の御宮が拜まれます。私はまづ御白幕の手前の石段の下に跪いて、小さい祈を捧げました。さうして傍に並んでゐた老爺、老婆が、拍手を打つては溜息まじ

現

西行法師

俗名佐藤義清、歌僧、建久元年(一〇六〇)寂年七十三。

かたじけなさに何ごとのおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼる。(西行法師の作と傳へる歌)

敬虔な額づく
敬(支・九畫)

たふと

單純
極度に

りに高聲の祈願を繰返すのに聞入りながら、現の間に、西行法師がかたじけなさに涙をこぼして額づいた、小さい敬虔な姿を思ひ浮かべました。

御事はかしこしわれら神杉にみもすそ川に涙おとすなり

嗽げ身すゝげといはぬばかりにぞすみくよする五十鈴川浪

直き清き強き心をあらはしてすくよ立てりたふと神杉

神宮は「單純」といふものの偉大さを極度に表現したもののやうに拜まれます。さうして、この御社の神杉

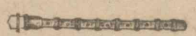
は、樹木の神々しさを極度に現したもののやうに思は

れます。私どもは内宮の御後なる神杉の根方を一面に蔽うた苔の美しさに見とれつゝ、もと來た道を引返して、みたらし川に嗽ぎ、折しも聞ゆる笙・筆・築の幽寂な雅樂の音に送られて、この神境を辭しました。さうして、顧みく宇治橋を渡つて、昭憲皇太后のめめで、聞し食したといふ赤福餅に腹をこしらへ、それから、車を命じて田圃路の五十九町を志

笙



筆 築



幽寂な幽(文・六畫)

雅樂雅(佳・四畫)

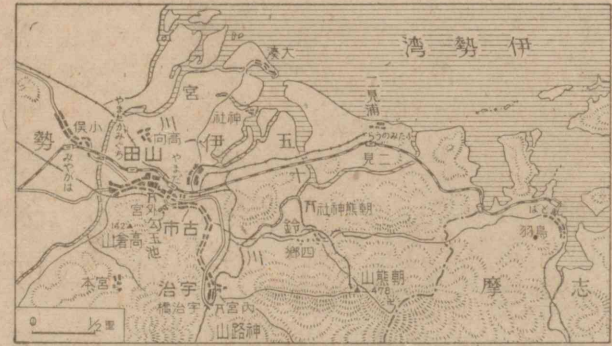
昭憲皇太后

御名美子、明治天皇の皇后、大正三年(一九一四)崩御、御年六十五。

めで聞し食す

赤福餅 宇治山田市の名産。

五十九町 約六キロ半。



志摩
三重縣志摩郡
朝熊岳
海拔五三四米
神路山
内宮南方の山
故由

大神宮儀式帳
或は内宮儀式帳と
もいふ、伊勢大神
宮の儀式行事を記
して朝廷へ奉つた
注進書、延暦二十
三年二月癸酉勘進
度會の國
今、三重縣度會郡
一帯の地



摩境の名山朝熊岳に走らせました。さうして、神路山の御蔭を浴び、御裳濯川の流に肥された田圃路を車に揺られながら、私はこの神境が大神の大御心に叶うた故由を考へました。「大神宮儀式帳」に、

度會の國は朝日の來向かふ國、夕日の來向かふ國、浪の音聞かぬ國、風の音聞かぬ國と、弓矢、鞆の音聞かぬ國と、大御心鎮ります國と、悦びたまひて、大宮定め奉りき。

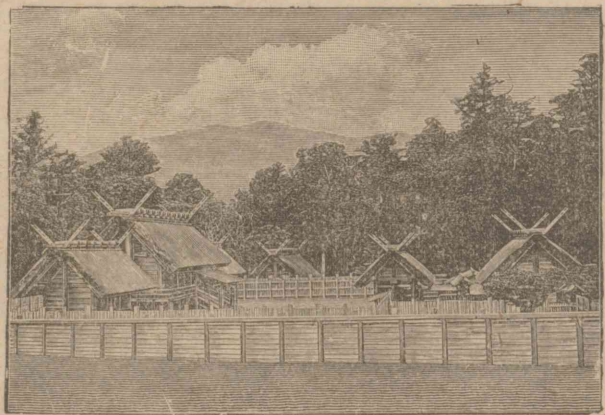
とあるのを見れば、第一には山水の景色の類なさを愛でさせられたのであらう、第二には地勢・氣候・風土のうるはしさを愛でさせられたのであらう、第三にはこの

可能性

消極的煩累
煩(火)
率(支)

見そなはず

饒舌



宮内

土地に永久なる平和の可能性のあることを愛でさせられたのであらう、最後には一切の消極的煩累にわづらはされずして、皇御孫に率ゐらるゝ大和民族の積極的光明的の發展を見そなはずに都合のよい、心の落ちつく境と思はせられたのであらう、など考へつゝ、折々車夫の饒舌に氣を轉じてゐる中に、い

つしか朝熊岳の麓につきました。朝熊岳は、天照大御

御杖代
倭姫命
第十一代垂仁天皇
の第四皇女
聖德太子
厩戸皇子、用明天
皇の第二皇子、推
古天皇の皇太子、推
古天皇の二十九
年(二六二)薨御
聖武天皇
第四十五代、天平
御年五十六
御年五十六
二、千尺
一千尺は約三百メ
ト
弘法大師
俗姓佐伯氏、號は
空海、真言宗の開
祖、承和二年(四
七)薨御、年六十二
二見
三重縣度會郡
鳥羽
三重縣志摩郡
水葦
五十嵐力著、五十
嵐力集第四、書翰
集、昭和四年(三
五)五月刊行

神の御杖代として、神路山五十鈴川の神境を定め給うた倭姫命の御心になつて、屢訪ひ登らせられ、遂にこの山にて終らせられたといふ尊い歴史のある名山、昔から兩宮の參拜を表參宮と呼び、朝熊の登山を裏參宮と呼んで、この山に詣でぬを片參宮といつた程の由緒のある名山、聖德太子、聖武天皇、弘法大師、その他の聖達の靈跡に神さびた名山、わづか二千尺の高さながら五六千尺以上の高山の面影を具へた名山であります。明日は早く奥院に詣で、午後は下山して二見に参り、それから鳥羽の鳥廻りをして、兩三日中に歸京いたします。 さやうなら。

(水 葦)

荻原井泉水

名は藤吉、東京市
の人、俳人、明治
十七年(一八四四)生。

八新

綠

荻原井泉水

奈良はいつ來ても好いが、殊に新緑の頃が好い。櫻の頃に來た時にはまだ黄いろく枯れたまゝであつた芝は、いき／＼と青んで、鹿が其の上に寝ころんだり、又その青い芽をたべたりしてゐた。

猿澤の池
興福寺五重塔南下
の池。
老いてる
ざわめき
ベンチ
「共同腰掛」の意、
英語。

猿澤の池の柳は、萌黄色をした其の若々しい美しさが、稍老いて、こんもりと葉を茂らしつゝ、水に映つてゐた。春によく來る團體の客のざわめきも今はなくて、池の縁にあるベンチには、木蔭を求めて子供を遊ばせてゐる女がゐるばかりだつた。

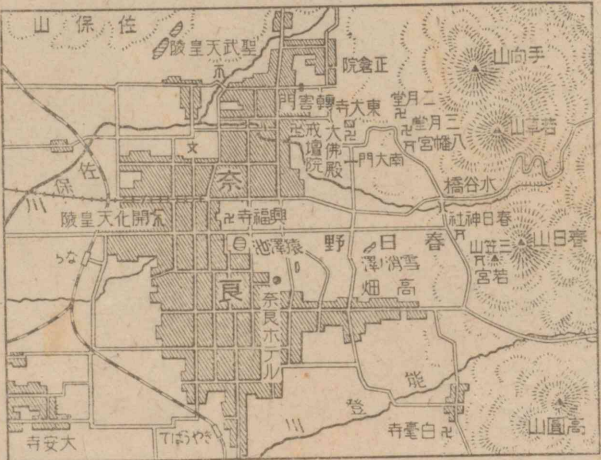
荒池 興福寺の東南方にある池。
 奈良ホテル 荒池の南にある、鐵道省直營の旅館。
 興福寺 奈良市の中央にある、法相宗の大本山、藤原鎌足の創建、藤原氏の氏寺。
 園丁 枝をおろす。
 若草山 奈良市街の東北にある。全山芝生に覆はれてゐる、海拔三四二米。
 高圓山 奈良市街の東南、春日山の南にある、海拔四六二米。
 高畑 春日野の南方の低地、あせびの名所。

荒池のほとりはなほ静かだつた。奈良ホテルに沿うて葉櫻のほの暗いほどの小徑を歩くのも好かつた。池には、稍遠くの興福寺の塔の影が映つてゐた。其の水に石を投げて、水の輪が出来るのに興じる子供たちもゐた。一つの輪が廣がつて、それが消えてゆくのを待つては、他の子供が又石を投げるのであつた。梅の木が林をなしてゐる處では園丁が其の枝をおろしてゐた。芝の上に落ちた青葉には、鹿が寄つて來て香を嗅いでゐた。若草山・高圓山がそれ／＼にこんもりとして輝いてゐた。高畑のからりとした芝生の上には、大きな花が

咲いたやうに美しい洋傘が動いてゐた。

あせびの花は大抵すがれてゐたが、其の花の多い谷のやうになつた路には美しい影が出來て、こまかく洩れてひそんでゐる光の戲も面白かつた。

春日の社に近い杉の木立は夏らしく黒み渡つて、その葉の先から愛らしい淺緑の爪のやうな若葉が出てゐた。參詣の人の多く通る道



あせびの花
 すがれる
 春日の社
 春日神社のこと、
 官幣大社、武甕槌
 命、經津主命、天兒
 屋根命・比賣命を
 祀る。

煎餅
煎(火)

せびる

背脊

文字通り

鹿子斑

斑(鹿)

斑(文)

南大門

東大寺の總門。



轉 害 門



猿 澤 の 池

には鹿が澤山待受けてゐた。私は煎餅を手に持つて
ゐるだけ皆與へてしまつたが、彼等は圓々としたかは
いゝ眼を私に向けて、いつ迄もせびるやうに蹠いて來
た。一つの鹿は、私の前で首を上げたり下げたりした。
それは御辭儀なのだつた。私は、私の前におとなしく
脚を折つてゐる鹿の背を、犬にでもするやうに撫でて
やつた。文字通り鹿子斑の其の肌はつやく／＼しかつ
た。五月は毛並の光澤の一番美しい時だといふ事
である。抜代つてまだ間もない角は、やつとY字形にな
つたばかりで、赤みを帯びて柔かさうだつた。手に握
つてみると、其の赤い色の血のぬくみが感じられた。

大佛殿

東大寺の金堂、東大寺は華嚴宗の大本山。

戒壇院

東大寺に属する堂宇、僧に戒を授けるための壇のある堂。

鴟尾



燦爛として

轉害門

東大寺の一門、天平(聖武天皇の御代、三六九-四〇九)年間の創建のまゝといふ。

簡素雄大な結構

南大門の通には燕が澤山飛んでゐた。そこらに佇んでゐる鹿の細く高い脚の間をすり抜けるかと思ふやうに飛んだり、角細工などの土産物を並べてゐる店の軒について飛入つたりしてゐた。

大佛殿を左へ、松林の間を行く路の感じも好かつた。草が長く伸びるまゝになつてゐる向かふに、實に古い堂が見える。それは戒壇院らしかつた。顧みると大佛殿の屋上の鴟尾が金光燦爛として松の間に高く聳えて、松の梢には蟬がじい〜と鳴きはじめてゐた。轉害門は奈良に残つてゐる建築のうちで最も古いものの一つであるが、その簡素にして雄大な結構はす

はひる(はいる)

繪畫的に
築地

きんぽうげ



茶亭

木の芽

谿(谷・十畫)



楓

ばらしいものだと思つた。私は其の門をはひつて大
佛殿の裏を歩いた。竹がわつさりと路に垂れてゐた
り、柿の若葉が日を照りかへしてゐたりした。古い寺
院の土塀が崩れた事によつて却つて繪畫的に見える
やうな、淋しいひつそりした道だつた。築地のすそに
はきんぽうげが咲き、白い小さい蝶が休んでゐた。
若草山の前の茶亭で晝飯をたべた。木の芽の吸物
を出した。若草山と春日山との間にある谿の道は、若
葉の緑が顔にうつるやうな朗な感じの處だつた。爪
先上りに苦しくないほどの登りになつて、山の奥に踏
込んでゆく。洞の楓といふ名のついてゐる通りに、楓

さすがに
亭(一)

亭



かまきり



芒



観音巡禮

荻原井泉水著、西
國三十三所の観音
の巡禮紀行、昭和
四年三月廿一月刊
行。

がトンネルのやうになつてをり、高い木には藤があち
らにもこちらにも咲垂れてゐた。奈良は藤の花の多
い處だが、公園の茶亭のそれなどは大方すがれてしま
つてゐるのに、こゝだけはまだふさふさとした紫を垂
れて美しかつた。
歩けばさすがに暑さをおぼえる。道に沿うて綺麗
な流があり、流に臨んで古風な亭がある。そこに私は
腰をおろした。青いかまきりの子が若い芒の葉先に
とまつてふらくくしてゐた。

(観音巡禮)

長谷川二葉亭

名は辰之助、二葉亭四迷の號もある、愛知縣の人、文學者、明治四十二年三月廿六日、年四十六。

九六ころ

長谷川二葉亭

けたましい
かほそい
めいる
堪へる

ふと目をさますときやん／＼といふ聲がする。耳をすまして聽いて居ると、疑もなく小犬の啼聲だ。時時咽喉でも締められるやうに、けたましくきやんきやんと啼きたてる其の聲尻が、やがてかほそく悲しげになつて、めいるやうに遠い／＼處へ消えて行く。と思へば、忽ち又近くで堪へきれぬやうに啼きだして、くんくと鼻をならすやうな時もあり、ぎやおと欠あひをするやうな時もある。

僕は元來動物好きで、わけても犬は大好きだから、近

いたいけな

處の犬は大抵知つてゐる。けれども、こんなかほそい、いたいけな聲で啼くのは一匹も無い筈だから、不思議に思つて、そつと夜著の中から首を出すと、

「どうしたの。寝られないのかえ。」

と、母が寢返りを打つてこちらを向いた。僕は此の返

答はさしおいて、

「あれは白ぢやないねえ、お母さん。もつと小さい犬の聲だねえ。どうしたんだらう。」

「棄犬さ。」

「棄犬つて何。」

「棄犬つて誰かが棄てていつたのさ。」

棄(木)

僕はしばらく考へて、

「誰が棄てていつたんだらう。」

「大方何處かの……何處かの人さ。」

何處かの人が犬を棄てていつたと、僕は二三度繰返して見たが分からない。

「どうして棄てていつたんだらう。」

「うるさいよ。」などといふ母ではない、何處までも相手になり、その意味を説明してくれて、もう遅いから黙つてお寢。」と優しく言つて、又彼方を向いてしまつた。

僕も亦夜著を被つた。犬は門前を去つたのか、啼聲が稍遠くなるにつれて、父の鼻が耳に附く。

鼻(鼻)

縁

寝られぬまゝに、夜著の中で、今聞いた母の説明を繰

返し繰返し味はつて見た。まづ何處かの飼犬が縁の下で兒を生んだとする。小さなむくくしたのが重なり合つて、首をもたげて、みいくと乳房を探してゐるところへ、親犬がよそから歸つて来て、その傍へどさりと横になり、片端から抱へ込んで、べろべろと舐めると、小さいから舌の先で他愛もなくころころと轉がされる。轉がされては大騒して起き返り、又よちよちと這寄つて、ぼつちりと黒い鼻面でお腹を探り廻り、漸く柔かな乳首を探り、當て、あわててちうと吸附いて、小さな兩手で揉みたて、吸出すと、甘い温な乳汁がどくと

舐める

他愛もない

あわてる

腋(肉)

産(生)

たうとう(とうと
う)

つい

銜(金)
む

くと出て来て、咽喉へ流れ込み、胸を下つて、何とも言へずおいしい。すると、腋の下から、まだ乳首に有附かぬ兄弟が鼻面で割込んでくる。とられまいとして、産毛の生えた腕を突張り、大騒をやつてみるが、たうとう取られて了ひ、そこらを尋ねて他の乳首に吸附く。其のうちにお腹も一杯になり、親の肌で身體も温つて、融けさうな好い心持になり、ついうとくとなる。銜んだ乳首が脱けさうになる。夢心地にもあわてて又吸附いて、一しきり吸立てるが、直に又他愛なくうとくとなつて乳首が終に口を脱ける。脱けても知らずに口を開いて、小さな舌を出したなり、一向正體がない。其の

足搔

領元
領(頁)

茫然と

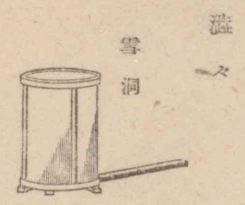
濡れしよぼたれる

時、忽ち暗闇からもじやくと毛の生えた、ふしくれだつた大きな腕がぬつと出て、正體なく寝入つて居るところをむずと引摺み、宙に吊す。驚いて目をほつちり開け、いたいな聲で悲鳴をあげながら、四足を張つて、藻搔くうちに、頭から何かで包まれた様で、眞暗になる。窮屈で息が詰りさうだから、出ようとするが出られない。しばらく藻搔いて居るうちに、ふと足搔が自由になる。と、領元を掴まれて高いくところからどさりと落された。うろくしてそこらを見廻すけれど、何だか變な、寂しい、眞暗なところで、誰も居ない。茫然としてゐると、雨に打たれて、見る間に濡れしよぼたれ、恐

しく寒くなる。身慄ひ一つして、くんくんと親を呼んで見るが、何處からも出て来ない。途方に暮れて、よちよち這出し、雨の夜半を唯ひとり温な親の乳房を慕つて、悲しげに啼廻る聲が、先刻一度門前へ来て、又何處へかさまよつて行つたやうだつたが、それが何時か又戻つて来て、何處をどう潛り込んだのか、今は啼聲が正しく玄關先に聞える。

居たくまらない

「お母さんく、門の中へ這入つて来たやうだよ。」
と、僕が何だか居たくまらないやうな氣になつて、又母に言懸けると、母は氣の無ささうな聲で、
「さうだね。」



「出て見ようか。」
「出て見ないでもいよ。寒いぢやないかね。」
「だつてえ。あら、あんなに啼いてゐる。」
と、折柄絶入るやうに啼きさけぶ犬の聲に、僕は我知らずむつくり起き上つたが、何だか一人では怖いやうな氣がして、
「よう、お母さん行つて見よう、よう。」
「本當に仕様がなない兒だねえ。」
と、口小言を言ひく、母も溢々起きて雪洞をつけて起き上つたから、僕も其の後について、玄關と言つてもついで次の間だが、玄關へ出た。

母が履脱へ降りて格子戸の掛金を外し、がらりと雨戸を繰ると、さつと夜風が吹込んで、雪洞の火がちらちらと靡く。その時、小さな鞠の様なものがつと軒下を飛退いた様だつたが、やがて雪洞の火先が立直つて、一道の光がさつと戸外にさし、雨水の處々に溜つた地面を、一筋細長く照らし出した處を見ると、ついそこに生後まだ一箇月もたぬ、むく／＼と太つた、赤ちやけた犬ころが、小指ほどの尻尾をちぎれさうに掉立てて、此方を見上げてゐる。形は僕が寝て居て想像したよりも大きかつたが、果して全身雨に濡れしよぼたれて、泥だらけになり、だらりと垂れた、割合に大きい耳から雫

をたらし、ぼつちりと兩の眼を青貝のやうに並べて光らせてゐる。

かはいらしい

況や

じつと

「おや／＼、まあ、かはいらしい。」
と、母もつい言つてしまつた。況や僕は犬好きだ。じつとしては居られない。母の袖の下から首を出して、ちよつちよつと呼んで見た。

するとさほど怖れた様子もなく、ちよ／＼と側へ来て、さすがに少し平べつたくなりながら、頭を撫でてやる僕の手を下からぐい／＼押上げるやうにして、べろべろと舐めまはし、手をくれるつもりなのか、頻りに圓い前足を舉げて、ばた／＼やつてゐたが、果はやんは

りと痛まぬ程に小指を咬む。
僕はかはいくてくたまらない。母の面を見上げながら、少し鼻聲を出しかけて、

「お母さん、何か遣つて。」

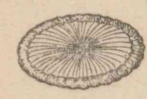
「遣るのもいゝけれど、居附いてしまふと、仕方がないねえ。」

と、口では拒むやうな事を言ひながら、それでも臺所へ行つて、缺茶碗に冷飯を盛つて、何かの汁を掛けて来てくれた。早速履脱に入れてこれを當てがふと、小犬は一寸香を嗅いで、すぐ甘さうに先づびちやくと舐めだしたが、汁が鼻の孔へ入ると見えて、時々くしんくし

顎(頁)

談判

棧倭法師



んと小さな嚏をする。忽ち汁を舐めつくして今度は飯に掛つた。他に争ふ兄弟も無いのに、頻りに小言を言ひながらがつくとたべ出したが、飯はまだ喰ひなれぬかして、とかく上顎に引附く。首を掉つて見るがそんな事ではなかく取れない。果は前足で口の端を引搔くやうな真似をして、大藻搔きに藻搔く。
此の隙に僕は母と談判を始めて、今晚一晚泊めて遣つてと、雪洞を持つた手にぶら下る。母はちよつと澁つたが、もうかうなつては仕方がない。「お父さんに叱られるけれど」と言ひながら、結局棧倭法師を捜して来て、履脱の隅に敷いてやつた。それは好かつたが、其の

うんざりする

晩啼きとほされて、僕はちつとも知らなんだが、お蔭で母は父に小言を言はれたさうな。

犬嫌な父は、泊めた其の夜を啼明かされてうんざりして、了つて翌日は是非追出すと言出したから、僕は小犬を抱いて逃廻つて、どうしても放さなかつた。父は困つた顔をしてゐたが、しかしそれも一時の事で、其の中には小犬も獨寢に慣れて夜も啼かなくなる。と、追出す筈の者に、何時しか「ボチ」といふ名まで附いて、姿が見えぬと、父までが一緒になつて捜すやうになつてしまつた。

平 凡

平 凡
長谷川二葉亭著、
小説、明治四十年
(三五六)十月、同年
十二月新聞紙上に
發表せられたもの。

一〇二つの世界

小川 未明

小さな女生徒たちで、汽車の中はいつばいでした。仲のいゝ同士が、あちらにかたまり、こちらにかたまり、お話をするもの、また雑誌を出してのぞき合ふもの、スケッチ帖をひらいて寫生するもの、それは、いろ／＼でありました。

「小山さん。」

「宮本さん。」

あちらとこちらで呼合つて、手眞似で語り合つたかとおもふときやつ、きやつといつて笑ひこけてゐまし

小川未明
名は健作、新潟縣
の人、童話作家、明
治十五年(五四三)
生。

た。

「ねえ、小野さん、あちらに見えるものなあに？」

「分からないわ。」

「新島さん、ちよつと雙眼鏡を貸してよ。」

「見えて？　こんどは私の番よ。」

「白いお家のやうなものよ。」

その時、汽車は山と山の間へはひりました。溪川が、

ごう／＼と音を立てて流れてゐます。

「百合の花が咲いててよ。あすこに咲いてゐるの、百

合でせう。」

「まあ、いゝことね。」

溪川（水・十畫）



百合の花

絶えず
はず。

高い山には、まだ雪が残つてゐました。六月でしたけれど、やうやく新緑になりかけた木立もありました。世の中の塵埃に汚れない白い花や、紅い躑躅の花などが、崖の上や、流のふちに咲いてゐました。みんなは、景色の變るたびに、窓からのぞいて喜び、はしやぎました。氣をつけて見るとこの同じ汽車の中に、もう一組の他の女生徒たちが乗つてゐました。服装も質素で、その數も僅かに十人に足らなかつたのです。こちらの大勢の女生徒たちが、笑ひさゝめくのに反して、絶えずだまつてうつむいてゐました。それもそのはず、彼女たちは盲の女生徒だつたのです。

ちやうど
かうして

ちやうど、遠足にいゝ季節でありましたから、偶然二組の女生徒たちが、かうして同じ汽車に乗合はしたのであります。もとより學校もちがへば、行先もちがつてゐたのでありませう。

そんなら、なぜこの盲の女生徒たちは、だまつて下を向いてゐたか？ それは眼のあいてゐる女生徒たちが、面白さうに話したり、笑つたりしてゐるのをきいてゐたのでした。そして、その話の中から、また、笑の中から、騒いでゐる様子から、何か自分たちにも分かる面白い外の世界を知らうとしてゐたのです。しかし、白い雪の残つてゐる高い山も、紅い花も、岩から迸る泉も、青

いたづらに

い空の色も、不幸な彼女たちには、分かるはずがありませんでした。たゞいたづらに、じつとして、耳をすましてゐるにすぎませんでした。

まつ枝さんと、きみ子さんは、さつきから盲の生徒たちが乗合はしたのに氣がついて、それとなく様子を見てゐたのであります。

「かはいさうね。なんにも見えなかつたら、どんなでせう？」

と、きみ子さんがいひました。

「だからあゝして笑ひもしないで、黙つてゐるのだから。」と、まつ枝さんがさゝやきました。二人は、どうしてあ

シ n	ワ wa	ラ ra	ヤ ya	マ ma	ハ ha	ナ na	タ ta	サ sa	カ ka	ア a
	キ ki	リ ri		ミ mi	ヒ hi	ニ ni	チ chi	シ shi	キ ki	イ i
		ル ru	ユ yu	ム mu	フ fu	ヌ nu	ツ tsu	ス su	ク ku	ウ u
	エ e	レ re		メ me	ヘ he	ネ ne	テ te	セ se	ケ ke	エ e
	ヲ wa	ロ ro	ヨ yo	モ mo	ホ ho	ノ no	ト to	ソ so	コ ko	オ o

字 點

の人達は盲になつたのだらうかと、心の中で思つてゐました。盲の女生徒の中に、縞柄から色合まで同じ著物をきた二人がありました。或は姉妹であつたかもしれませんが、眼のあいてゐる女生徒の中で自分たちを見てゐるものがあらうとは、知るわけがなかつたのです。二人は、親しさうに、手をとり合つたり、見えない臉をふるはせて、ここにこと笑つたりしてゐました。

點字
點(黒)
ほゝゑむ

そのうちに、一人は懐から手紙を出しました。盲ですから、普通の文字が書いてあるのでありません。そ



筆 新 家 古

の手紙は點字なのであります。彼女は、指先で一字一字讀んで、楽しさうにほゝゑんでゐましたが、讀終るとこれを隣の一人に渡しました。彼女はまた指先

で読んで行くうちに、手紙には、何が書いてあるのか、面白さうに、にこ／＼と笑ひました。いつしか、二人は、一緒に指先でその手紙を探つて、聲を立てて笑つたのであります。

「どんな面白いことが書いてあるんでせう？」

思はず、まつ枝さんときみ子さんは、顔を見合つて笑ひ、頭をのばして、點字の手紙をのぞいて見ました。けれど、盲の女生徒たちが明かるい世界のことから分からない様に、分からなかつたのです。

大勢の女生徒たちは、朗な聲で、歌をうたひはじめました。まつ枝さんも、きみ子さんも、みんなと一緒にな

つてうたひました。そして、しばらく、盲の女生徒たちのことを忘れてしまつたのです。

ふと思ひ出して、盲の人達を見ると、彼女等はもう笑ふのをやめて、またもとの様に下を向いてじつとしてみました。そして他の眼の見える女生徒たちが、歌つたり、騒いだりしてゐる氣配の中から、何か自分たちにも分かる面白いものを探してゐる様に見えました。

汽車は、ホツ、ホツと喘ぎながら、峠を上つてゐます。

白樺の林があつて、木の幹が、さながら雪の様に白いのでした。

「あれが白樺の木よ。」

氣配

喘ぐ

と、みんなは窓から頭を出しました。たちまち、汽車は、トンネルにはひつたのです。

「わーつ」と、急に暗くなつたので、みんなは聲をあげました。ガタン、ゴー、ゴーツといつて、ぢきに汽車は、暗い世界から、明かるい世界へ出てしまひました。

「しかし、いつもこんなに暗かつたら、どんなでせう？」と、まつ枝さんときみ子さんは、心から不幸な人達に同情しました。そして、二人はこの世の中にかうした不幸な人達があるのをしみじみと知つただけでも、こんどの旅行はいゝ旅行であつたと思ひました。

(大阪朝日新聞)

大阪朝日新聞
本課は昭和七年三月三
日六月十九日刊
行のものに據つた。

野上彌生子

本名八重子、野上
豊一郎の夫人、小説家、評論家、明治十八年(三四五)生。

二 飼ひもの

野上彌生子

臺所の棚の隅に、うす黒い布巾のやうなものをくしやくしやに丸めてあるのが、目に入つた。お膳布巾の古いのでも突込んであるのだと思つたので、

「布巾をこんなところに置いてはいけないね。」といふと、女中が、

「それは、布巾ではございません。中のおぼつちやまが、猫の洗濯をなすつたのです。」

と答へた。變なことをいふと思ひながらつまみ上げて見ると、なるほど猫であつた。白天鷲絨で拵へた猫

の皮であつた。廣げると、丁度實物の猫の皮を開いた時のやうに腹で割かれ、四隅には四つの脚がついてをり、首の上に鼻と口とを形づくつてゐる赤い絹絲は色が褪せてゐた。尻つぼはと見ると、これは小指ほどの長さのものが綿の入つたまゝ、胴とは別になつてそばに轉がつてゐた。

よく聞いて見ると、昨日の日曜日に、Mがおもちやの天鵞絨の猫があまり汚れてゐるから洗濯してやるといつて、中の詰物を引張出し、流して石鹼をつけて一所懸命に洗つたのださうである。Mちゃんの猫の洗濯といふことが、それ以來家中の笑ひ話になつた。

懸一縣
驗一驗
儉一儉

小 鰕



栗鼠

蠶



蒐集
玻璃
玉

この小學生はあらゆるものを飼ひたがる。今飼つてゐるものを挙げると左の通りである。

小鰕一匹、蟻三匹、金魚十尾、栗鼠二匹、子犬一匹。この中金魚以下の三種は兄弟の共有である。それから蠶七匹、蚤一匹、蛙の子四匹、蛤一つ。

これ等の奇妙な蒐集のうちで、適當な棲家を貰つてゐるのは玻璃鉢の金魚と、金網のついた箱の中の栗鼠と、小さい犬小屋をもつてゐる子犬くらゐなもので、他はその雑多な組合はせに相當した變な容物の中に收容されてゐる。

小鰕と蛤とは小さいフラスコの中に、蟻はマツチの

空箱の中に、蠶はカステラの箱に、蚕は薬の小罎に、最後の蛙の子は大きな空樽の中に入れて、子供部屋のお父様からお譲りの大きな卓子の下に持込まれてゐる。この蛙は、植物園の池でお玉じやくしからやつと蛙になつたばかりのところを苦心して捕らへて來たのだから、最も大事な記念物である。同時に彼は、空樽が蛙たちに取つて故郷の池と變らない楽しい場所となるやうに工夫を凝らした。彼は樽に水を湛へ、底に泥を敷き、その中に二つの石を岩の如く水から抽きんでさせ、間に草まで植ゑた。これは泳に疲れた蛙を休息させるためであつた。

抽きんでる

抽きんでる

お八つ

餌だけには少し困つた。理科の教科書は、蛙が水中の小動物を食物としてゐることを彼に教へた。併し、池中にゐるやうな小動物が新しい空樽の中に急に發生する筈はなかつたので、彼はビスケットやお煎餅のかけらで、我慢して貰ふことにした。本當をいふと、お八つに戴くすべてのお菓子が蛙の餌であつた。卓子の前の椅子に腰かけ、お盆の上で自分を待つてゐる毎日の楽しみをお八つを食べる時には、彼の兩足はいゝ足臺のつもりできつと蛙の樽の上に載つてゐる。さうして、同じお八つ仲間の兄弟達と、饒舌つたり笑つたりする度に、盛に口から飛散る菓子のかけらは、悉く下

好奇心

生物學

過程

の蛙の樽の中にこぼれ込むから。



栗鼠

Mがこの蛙の子を大事がるのは、生きものを珍しがる子供の性來の好奇心と愛情とにもとづくのは勿論であるが、それでも子犬や栗鼠や金魚などに對するのとは別な、一種生物學的の興味がある。彼は蛙の蟻や蚤を飼つてゐるのも同じ意味である。彼は蛙の現在の黒い上衣が、どんな過程を取つていつどんな色に變色するか、それを觀察したかつたのである。

彼は學校から歸つて來ると、毎日新な期待をもつて、何より先に樽をのぞきこむ。帽子も脱がず、靴も上靴

しよつた(せおつた)

桑の葉

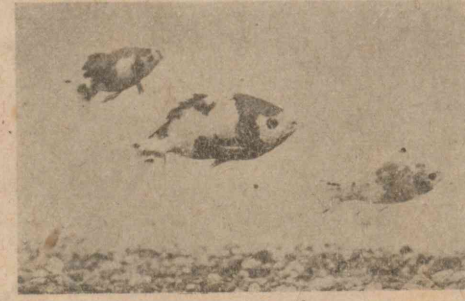


郊外 (P右・邑)

所有權

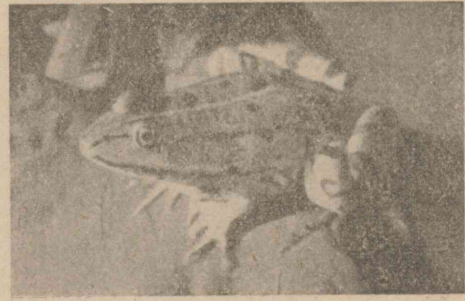
行使法

袋もしよつたまゝである。この時彼のポケットには、ハンカチや、鼻紙や、白チヨークの破片などと一緒になつて、桑の葉が一杯詰めこまれてある。家には桑の木がないので、彼は自分の七匹の蠶のために、郊外から通ふ友達に頼んで、毎日新しい桑の葉を摘んで來て貰ふのである。栗鼠や金魚の如き共有物は、世話も兄弟お互で助け合つてゐるが、自分のと極つたものだけは、子供仲間の所有權に對する最も原始的な、それだけ恐しく嚴正な行使



魚 金

法によつて、自分でことごとく面倒を見なければならなかつた。日曜日になつて、貰ひためた桑の葉を使ひ



蛙は、いつまでも樽の底におとなしくしてはゐるなかつた。手足が伸び、胡桃形の胴ががちり締つて来る

きつてゐるのが分かつた時などは一騒であつた。彼は近くの田端の臺や、谷中の森の方まで桑の木を探しに行かなければならない。併し、それほど手数のかゝる蠶でも、そのうちにだん／＼成長した蛙に比べれば、まだしも始末がよかつた。

田端
東京市澁野川區。
谷中
同市下谷區。

胡桃
胡桃

ばね仕掛の玩具



足場

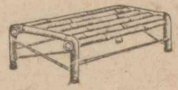
索牽

入學試験お伴の記
野上彌生子著、教育に關する評論及び隨筆集、昭和八年(一九三三)刊行。

と共に、飛躍力も増大した。彼等は水からつき出た岩を足場にして、ばね仕掛の玩具のやうにびよん／＼樽の外へ飛出した。學校から歸つた小學生は、或日、樽の中に蛙が一匹もゐなくなつてゐるのを見て吃驚した。彼は卓子の後に這ひこんだり、書棚をのけて見たり、大搜索の末、やつと三匹のいたづら者を、それ／＼の隠れ場所から發見した。一度は一匹の蛙が、どうしても見つからなかつた。卓子の前の窓から庭へ飛出したのだといふことになつた。明けの日の朝、彼等が自分達の蚊帳を疊んでゐると、驚くべきことには、迷子の蛙が蚊帳の中から飛出して來たのである。(入學試験お伴の記)

吉村冬彦

本名は寺田寅彦、高知縣の人、物理學者、理學博士、東京帝國大學教授、昭和十年(一九三五年)卒、年五十八、竹製の涼み臺



一二涼み臺

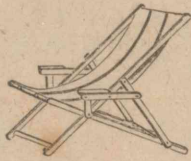
吉村冬彦

毎年夏になつて、そろ／＼夕方の風が戀ひしい頃になると、物置にしまつてある竹製の涼み臺が中庭へ持出される。これが持出される日は、私の單調な一年中の生活に、一つの著しいくぎりを付ける重要な日になつてゐる。もう明日あたりは涼み臺を出さうぢやないかといふことが、誰かの口から言出される。しかし、其の翌日が雨であつたり、さうでなくても、色々のことに紛れたりして、つい一日二日と延びる。其の内にいよいよ今日はと言ふことになつて、朝の内に物置の屋

黴(黒)

丁寧

折疊椅子



根裏から臺が取下され、一年中の塵埃や黴がぬれ雑巾で丁寧に拭ひ清められ、それから裏庭の日陰で乾かされる。そして、いよ／＼夕方になつてから中庭に持出されると、それで、始めて私の家に本當に夏が來たといふ心持になるのである。

涼み臺の外に、同時に、折疊椅子が三つ並べられて、一同が中庭へ集る。まだ明かるい宵の内には、繩飛をする者もあれば、寫生帖を出しておばあさんの後姿をかいてゐる者もある。明朝咲く朝顔の蕾を數へて報告する者もある。幼い女兒二人は、縁側へいろ／＼なお花を並べて、花屋さんごつこをすることもある。暗く

お伽噺
お國

郷
妖精國
幻像

家鴨



新話

なると、花火をしたり、お伽噺をしたり、おばあさんに「お國の話」をさせたりしてゐる。幼い子等には、まだ見たことのない父母の郷國が、お伽噺の中の妖精國のやうに、不思議な幻像に満たされてゐるやうに思はれるらしい。例へば、郷里の家の前の流に家鴨が澤山遊んでゐて、夕方になると、上流の方の飼主が小船で連れに来るといふやうな、何でもない話でさへ、何かしら一種の夢のやうなものを、幼い頭の中に描かせると見える。それで、いつも「お國の話」をねだつてはおしまひに、「あたしもお國へ行きたいなあ」と、一人がいふと、もう一人がおなじ言葉を繰返すのである。子供等の亡祖父の若

會津戦争
明治元年(五三)會津であつた戦争。
西南戦争
明治十年(五三)西郷隆盛を擁した一黨が鹿児島に兵をあげた時の戦争。
淨化される
純化される

かつた頃の昔話も屢出る。私自身が子供の時分に幾度も聞かされた話が、また、同じ母の口から出るのを聞いてゐると、それがもう遠い昔の出来ごとであつて、數年前まで生きてゐた私の父に關する話とは思はれないやうな氣がする。まして祖父を見たことのない、或は臆げにしか覚えてゐない子供等には、會津戦争や西南戦争時代の昔話は、書物で見る古い歴史の斷片のやうにしか響かないだらう。そして、それだけに、却つて祖父に對するなつかしきは淨化され、純化されて、子供等の頭の中の神殿に收められるだらうと思はれる。

黄道
黄(黄)

近刊
天文

あたる

處女宮

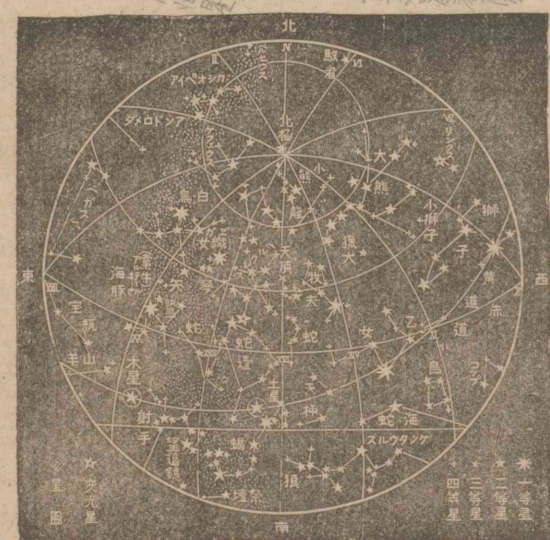
乙女座のこと、(次
頁星座圖参照)

軌道

今年の夏の初に、涼み臺が持出されて間もなく、長男が宵のうちに南方の空に輝く大きな赤味がかつた星を見つけて、あれは何かと聞いた。見ると、それは、黄道に近い所にあるし、ちら／＼瞬きをしないから何れ遊星には違ひないと思つた。そして、近刊の天文の雑誌を調べて見ると、それが火星だといふことがすぐに分かつた。星座圖を出して来てあつて見ると、それは處女宮の一等星スピカの少し東に居るといふことが分かつた。それで、其の圖のうへに鉛筆で現在の位置をしるし、其の脇へ日附を書いて置いて、此の夏中の此の遊星の軌道を圖の上で追跡して見ようといふこと。

動機
動(力)

星宿
星(日)



七月の星座圖

を投げてみた。

にした。それが動機となつて、子供は空のよく晴れた晩には、とき／＼星座圖を出して、目立つた星宿を見較べてみた。其の頃は、まだ織女や牽牛は宵の中にはかなり東にあつた。西の方の獅子宮には、白く大きな木星が屋根越しに氷のやうな光

語暗

空をながめてゐるうちに、ときどき流星が飛んだ。私は流星の話をすると同時に、熱心な流星観測者が夜中、空を見張つてゐる話をして、それから所謂新星の発見に關する話もして聞かせた。おもだつた星座を語り記してゐれば、素人も新星を発見し得る機會はあるといふことも話した。

一秒時間に十八萬六千哩を走る光が、一箇年かゝつて達する距離を單位にして測られるやうな、莫大な距離をへだてて散布された天體の二つが、偶然接近して、新星の發現となる機會は、譬へば釋迦の引いた譬喩の、盲龜が百年に一度大海から首を出して、孔のあいた浮

莫大な
散布される

偶一遇一隅

譬喩

譬(言)

盲龜浮木

一眼ノ龜ノ浮木ノ

孔ニ値フガ如シ。

孔一穴

(法華經)

光度

木にぶつかる機會にも較べられるほど少さうであるが、天體の數の莫大な爲に、新星の出現は、それほど珍しいものではない。唯光度の著しく強いのが割合に稀である。

こんな話よりも、子供を喜ばせたのは、新星の光が數十年の過去のものだといふことであつた。我が家の先祖の誰かが、何處かで、どうかしてゐたと同じ時刻に、遠い宇宙の片隅に突發した事變の報知が、やつと今の世に、此の世界に届くといふことであつた。

八月になつてから、雨天や曇天がしばらく續いて、涼み臺も片隅の戸袋に立てかけられたまゝに、幾日も經

宇宙

天頂

つた。

ある朝新聞を見てみると、某理學士が流星の觀測中、白鳥星座に新星を發見したといふ記事が出てゐた。其の日の夕方に涼み臺へ出て、子供とともに其の新星を捜したらすぐ分かつた。しばらく見なかつた間に季節が進んでゐることは、織女牽牛が宵の内に眞上に來てゐるのでも知られた。そして、新星はかなり天頂に近く、白鳥座の一番大きな二等星と光を争ふほどに輝きましたゝいてゐるのであつた。

「しばらく怠けたので、新星を發見し損つたね。」
といつたら、子供はどう思つたか、顔を眞赤にして、面白

さうに笑つてゐた。

其の内にまた曇天が續いて、朝晩はもう秋の心地がする。どうかすると夜風は涼し過ぎる。涼み臺もつい忘れられがちになつた。従つて、星のことも、もう子供の頭からは消えてしまつてゐるらしい。新星の今後の變化を研究すべき天文學者の仕事は、これから始まるので、學者達は、毎晩曇つた空を眺めて、晴間を待ちあかしてゐることであらう。

冬彥集

寺田寅彦著、隨筆
集、大正十二年三
月、一月刊行。

冬彥集

吉田絃二郎

名は源次郎、佐賀
縣の人、小説家、
隨筆家、明治十九
年（西曆）生。

一三七 夕 祭

吉田絃二郎

七夕祭は、田舎の子供にとつては楽しい年中行事の
一つである。

夜毎に銀河が近くはつきりと見えるやうになつて
來ると、子供たちの頭には、笹に吊した色紙が浮かんで
來るのである。

野天のなかに焚かれてゐる風呂の中で、私たちは母
親から牽牛星や、織女星を指さして教へられるのであ
つた。

何といふ星であらうか、銀河から少し南西に寄つて

野天

牽（牛）
教へる

三角形を作つた星群がある。そして、頂點をなした中
央の星だけが紅く見えるのである。

「眞中の星さまが紅いだらう。あれは左右の星さま
を擔いでゐるからだ。右と左の星は秋の收みのり穫だ。だ
から、豊年になればなるほど右と左の星が重くなるの
で、眞中の星さまの顔が紅くなる。」といふやうな母の話
を、私たちは野天風呂の湯をばちやく／＼させながら聽
いたものであつた。

雨が一粒でも降れば天の川が溢れるので、牽牛星と
織女星とは逢ふことが出來ないといふやうな話も聽
かされた。

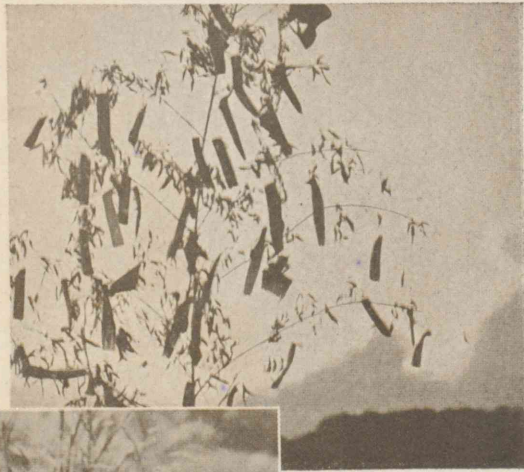
野天風呂

磨 擦

子供心
裁(衣)

「かはいさうに、また雨が降つて来た。」と言つて、牽牛星や織女星の不運を悲しんでやる者もあつた。七夕の夜は全く雨になることが多かつた。

私たちは三日も四日も前から、紅・白・緑・黄・淺黄・青・黒などの色紙を買つて来て、短冊を拵へては、朝早く起きて、蓮や稻の葉の露を集めて墨を磨つて、短冊に字を書いた。六日の朝は、山から大きな男が笹竹を擔いで賣りに来るのであつた。他家の竹よりも自家の竹が大きくて丈が高いといふのが、子供心にもほこりであつた。姉や妹たちは、五色の紙で著物を裁つて星にさゝげるのであつた。



祭 夕 七

黍(黍)

小島の来る日

吉田絃二郎著、感想文・抒情文を集めたもの、大正十一年(天三)五月刊行。

子供たちの身になると、七夕の宵に雨が降るといふことは、牽牛星や織女星のためよりも、むしろ自分等の七夕竿が濡れることのために悲しかつたのであつた。私たちは雨に濡らすまいと思つて、七夕竿をどうかしようとする。親たちは、雨が降つてゐても七夕さまは短冊を見て下さるから……と言つて、私たちの手をとめた。雨は大抵嵐をつれてゐたので、筐に結びつけられた色紙は茄子畑だの黍畑だのへ散つて行つた。

(小島の来る日)

相馬御風

名は昌治、新潟縣の人、文學者、明治十六年(三五三)生。

一四 良寛さま

相馬御風

一 良寛さまの習字

良寛さまはたいそう字が上手でした。昔から日本中に幾人もならぶ人がないほどに上手でした。しかし、良寛さまは一生手習をやめませんでした。托鉢の途中で休んでゐる時なんかでも、良寛さまは棒切や指で、砂や土の上に、字を書いたり消したりして、習字をしました。

或人が良寛さまに習字のしかたをたづねますと、良

良寛

通稱榮藏、俗姓山本氏、越後國(新潟縣)の人、禪僧、歌人、天保二年(四九二)寂、年七十四。

托鉢
托託

たづねる

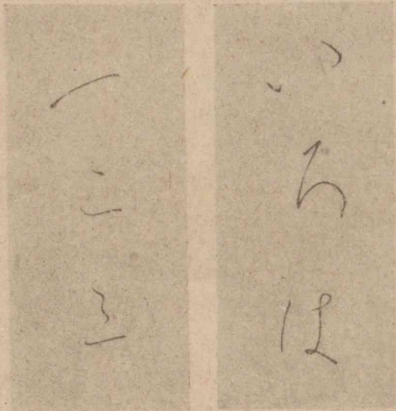
寛さまは、

「いゝお手本で一所懸命習ふがいゝ。それから、お手

本を習ふ時には、お手本の字ばかりを見て、自分の手もとを見てはいけない。さうすれば、きつといゝ字が書ける。」と教へました。

それから又、良寛さまは、そ

の人に空中習字と言ふことをも教へました。朝早く起きて口をすすぎ、顔を洗つた後で、家の外に出る。そして、朝の空をながめる。朝の空をながめるのは氣持



良寛筆蹟

のいゝものだ。そのいゝ氣持で、こんどは空に向かつて右の手をぐんと伸ばす。そして、空一ぱいに大きな字を書く。空はかぎりなく廣いから、どんな大きな字でも書ける。

そこで、毎朝それをつゞけるのだ。「一」といふ字でも、「神」と言ふ字でも、「佛」と言ふ字でも、何でも自分の一番書きたいと思ふ字を、毎朝早く起きて、何度もつゞき、空一ぱいに大きく書くのだ。それが一等いゝ習字法だ。

かう言ふのが良寛さまの空中習字の法と言ふのでした。良寛さまは毎朝それを何十年もつゞけました。そして、あのやうにのび／＼した立派な字が書けるやうになりました。

二 父のかたみ

良寛さまのお父さんは、山本左門ササキ泰雄タカオと言つて、たいそう學問のあるえらい人でしたが、六十の年に京都でなくなりました。

良寛さまはそのお父さんの書いた掛物を壁にかけて、死ぬ日まで毎日々々それを拜んでゐました。それには、

朝ぎりに一段ひくし合歡カウカンの花

以南イナン

と書いてありました。以南といふのは、良寛さまのお

えらい

父さんの別の名でした。良寛さまはその掛物の隅に
小さく、

水莖の跡
ありし昔

水莖の跡は涙にかすみけりありし昔のことを

おもへば

添へる

といふ歌を書添へました。それは昔のことを思ふと
涙が出て来て、懐かしいお父さんの字さへよく讀めな
いと言ふ意味です。

發句

また、良寛さまはお父さんのその發句（まげ）を讀んで、

朝ぎりの
大和物語にある
歌

朝ぎりの中に君ますものならばはるゝまにま
にうれしからまし

と言ふ昔の人の詠んだ歌も書きました。

たちねの
佐渡
新潟縣佐渡郡、新
潟市の西方の海中
に在る島

それは、お父さんの發句にある朝霧の中に咲いてゐ
る合歡の花のやうに、若しお父さんも霧の中にかくれ
ておいでになるのならば、霧がはれるにつれお父さん
に逢ふことが出来て、どんなにうれしいことだらう、け
れども、お父さんは霧の中においてになるのでなくて、
死んでおしまひになつてゐるのだ。——かう言ふや
うな悲しいおもひをあらはすために、書かれたのでし
た。良寛さまはそれほど孝心のふかい人でした。
また、良寛さまの歌に、
たちねの母のみ國と朝夕に佐渡が島べをう
ち見つるかな

良寛さま

相馬御風著、良寛の行跡を童話風に書いたもの、昭和五年(一九三〇)五月刊行。

と言ふのがあります。良寛さまのお母さんは佐渡の國の人でした。此の歌はお母さんの亡くなつた後「あ、あそこがお母さんのお生まれになつた佐渡が鳥だ、お母さんがもつと生きてみてくだすつたら……」と言ふやうな悲しい氣持で、朝に晩に佐渡が鳥をながめては、亡くなつたお母さんをおもつてゐたと言ふことを詠んだのです。これだけを見ても、良寛さまがどんなにお母さんにも孝行であつたかと言ふことがよくわかります。































(良寛さま)

形體的

鳥、魚、山、地、目、口、木、女、男、文字の形體的な記號である。我々が心に思ふことを他人に傳へるのには言語で十分であるが、遠隔の地に傳へるとか、永久に保存するとかのために、文字の力に依らなければならぬ。文字は言語の缺點を補ふために作られたものであつて、その人類の文化に與へた

一五文 字

編者

	a		ā		ā		男
	i		u				女
	b		p		f		m
	n		r, l				魚
	x		h		h		s
	s, sh		k		q		k
	t		t		l, ih		地
	t, (tch)						山

字 文 及 埃

めに作られたものであつて、その人類の文化に與へた

貢獻は實に偉大なものがある。

世界の文字の系統には埃及文字と支那文字との二大別があり、我々が平素使用してゐる文字は、支那文字の系統に屬する漢字と國字と假名との三種類である。漢字は支那で作られたもので、黃帝の時代に蒼頡といふ者が鳥の足跡から考案したと傳へられてゐる。我が國に漢字が傳來したのは、應神天皇の御代だと記録にはあるが、事實はもつと以前から傳へられてゐたものであらう。

漢字の最初は簡単な繪畫に近いものであつた。

○(日) 月(月) 山(山) 水(水)

黃帝

支那古代の天子、三皇の一人。

應神天皇

第十五代、紀元九七〇年崩御、御年百十一。

手(手)

魚(魚)

竹(竹)

車(車)

右の如く物の形を象つて作つたもので、これを象形文字といふ。形をまねることの出来ないものは、象形文字を本として、これに線や點を加減して工夫をこらした。

上(上)

下(下)

木(木)

本(本)

この様にして作つた文字を指事文字といふ。以上の象形と指事とは漢字の作り方の基礎で、これを更に組合はせることによつて多くの文字が作られるのである。日と木とを組合はせて東の字とし、木を二つ組合はせて林の字を作る。人と言とて信の字とし、口と

象形文字

指事文字

會意文字

諧聲文字
形聲文字
諧階楷

轉注
假借
六書

鳥とて鳴の字とするやうに、文字の意味を合はせて新しい字としたものを會意文字といふ。又、文字を組合はせる時に一方からは意味をとり、一方からは音をとる場合もある。江・紅の字に於ける水糸は意味を表し、工は音を表してゐる。鷄・鶴・鳩など皆これであつて、このやうにして出来た文字を諧聲又は形聲文字といふ。この方法で出来た文字は、その数が非常に多い。

以上は漢字の構造法であるが、この外に、使用法の上に轉注・假借の二法がある。この六つを合はせて漢字の六書と言つてゐる。

漢字の總數は約五萬と言はれてゐるが、我々が日常

部 畫
首

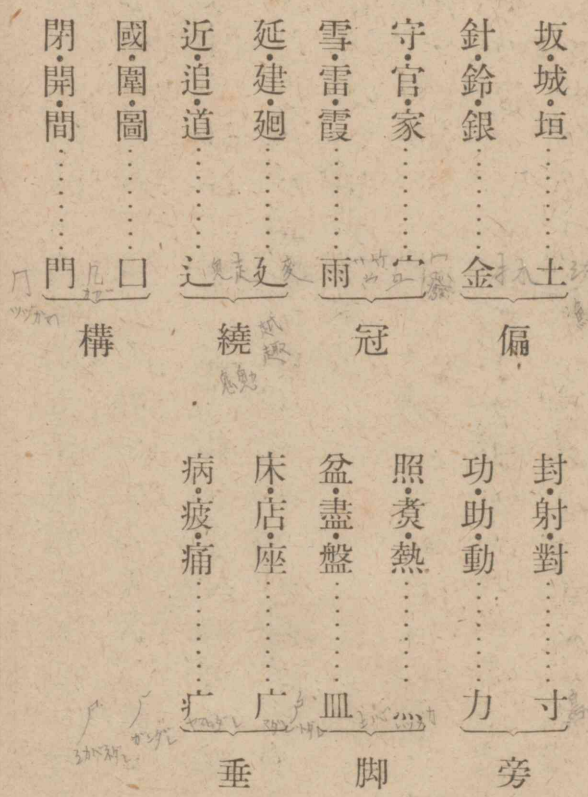
構 成

使用してゐるものは約五千位だと言ふ。けれども、我はその全部の文字を知つてゐる譯でないから、知らない漢字にぶつかつた時には、辭書を引かなければならない。辭書を引くには、その字の畫と部首とを豫め知つて置く必要がある。

漢字は、すべて點(丶)と畫(一・丨・ノ・へ・し・丁等)とから出来てゐる。従つて、すべての漢字はその點と畫との數を數へることが出来る。知といふ漢字は八畫であり、識といふ漢字は十九畫である。

漢字はその構成上、偏・旁・冠・脚・繞・垂・構の七つの部分から出来てゐる。偏は漢字の左の部分、旁は右の部分、冠

は上の部分、脚は下の部分、繞は繞つてゐる部分、垂は垂れてゐる部分、構は圍んでゐる部分をいふ。次にその例を示して見る。



訓音

右の如き部分は、辭書によつて漢字を引く時の大切な著眼點であつて、これを部首といふ。部首によつてその漢字が如何なる部に屬するかを知り、次に部首を除いた残りの畫數を數へて、その字を辭書の中から探し出すのである。

漢字には音と訓とがある。音は字音のことで、漢字本來の讀方であり、訓は字訓のことで、その字の示す國語の意味に従つた讀方である。草木をサウモクといへば音で讀んだのであり、クサキといへば訓で讀んだのである。

漢字の音には吳音・漢音・唐音・現代支那音の四種類が

憎惡

ある。京都行狀の京行の類は吳音であり、京師行爲の京行は漢音であり、南京行宮の京行は唐音である。上海漢口芝罘などはいづれも現代の支那音である。吳音は我が國に最も早く傳はつた音で、佛教に關する語に多く用ひられてゐる。漢音は遣唐使などによつて傳へられた音で、唐の文化と共に盛に我が國に用ひられ、漢字の音の中では最も多く用ひられてゐる。唐音は宋以後僧侶などによつて傳へられた音で、あまり多くは用ひられない。現代支那音は地名その他特殊なものにだけ用ひられてゐる。又同じ漢音でも善惡憎惡音樂苦樂の惡樂の文字のやうに、意味を異にするに

複復腹

を。を。け。ば。ぢ。ふ。

従つて音の違ふこともある。

漢字の訓は漢字の持つてゐる意味に相當する國語を當てたものである。その當方は中々複雑である。山海鳥獸花空のやうなものあれば、今日明日叔父叔母海苔香魚のやうなものもある。又隧道燐寸煙草莫大小襪衣等のやうに西洋語を當てたものもあり、七夕流石五月蠅し等のやうに漢字と訓との關係のすぐには分らないものもある。又同字に對して多くの異訓のある場合があり、多くの異字に對して同訓のある場合があつて、漢字と訓との關係は複雑である。

漢語の熟字は、音讀する時は二字とも音讀し、訓讀す

片假名・平假名字源表

ア(阿)	イ(伊)	ウ(宇)	エ(江)	オ(於)
カ(加)	キ(幾)	ク(久)	ケ(介)	コ(己)
サ(散)	シ(之)	ス(須)	セ(世)	ソ(曾)
タ(太)	チ(知)	ツ(州川)	テ(天)	ト(止)
ナ(奈)	ニ(二)	ヌ(奴)	ネ(禰)	ノ(乃)
ハ(八)	ヒ(比)	フ(不)	ヘ(部の多)	ホ(保)
ハ(波)	ヒ(比)	フ(不)	ヘ(部の多)	ホ(保)
マ(万)	ミ(三)	ム(牟)	メ(女)	モ(毛)
ヤ(也)	ヨ(由)	ユ(由)	ヨ(興)	ヨ(興)
ラ(良)	リ(利)	ル(流)	レ(禮)	ロ(呂)
ワ(和)	ヰ(井)	〇	ヱ(慧)	ヲ(乎)
ン(三ノ開名)	〇	〇	ゑ(惠)	を(遠)
ん(无)				

る時は二字とも訓讀する
のが常であるが、小僧・野宿
敷布・團子・役場のやうに一
方を訓讀し一方を音讀す
るものもある。小僧・野宿
敷布のやうなのを湯桶讀
と言ひ、團子・役場のやうな
のを重箱讀と言つてゐる。
國字は漢字の構成法に
ならつて我が國で作つた
もので、多くは會意文字で

湯桶讀
重箱讀

ハ(八)	ヒ(比)	フ(不)	ヘ(部の多)	ホ(保)
ハ(波)	ヒ(比)	フ(不)	ヘ(部の多)	ホ(保)
マ(万)	ミ(三)	ム(牟)	メ(女)	モ(毛)
ヤ(也)	ヨ(由)	ユ(由)	ヨ(興)	ヨ(興)
ラ(良)	リ(利)	ル(流)	レ(禮)	ロ(呂)
ワ(和)	ヰ(井)	〇	ヱ(慧)	ヲ(乎)
ン(三ノ開名)	〇	〇	ゑ(惠)	を(遠)
ん(无)				

ある。辻・峠・袴・島・風・風・俣・鰯
榊の如きものや、哩・吋・糲・耗
疋・腺などはみなこれであ
る。
假名は漢字の表してゐ
る意味を捨てて、その音だ
けを借りて國語を書き記
したものである。假名の
最初は萬葉假名であつて、
阿伊宇江於や、あり(有)なし
(無)に蟻梨の字を用ひる如

草書

きがこれである。今の平假名片假名はこれから發達したものであつて、平假名は草書の體を簡單にしたもの、片假名は偏旁冠など字畫の一部をとつて作つたものである。假名と漢字の相違は、漢字が言語の發音と意味とを表すに對して、假名は言語の發音だけを示して、決して意味を表さない點にある。この點で假名はローマ字と似た性質をもつてゐて、文字としては進歩したものである。平假名は空海、片假名は吉備眞備によつて作られたといふ言傳へがあるが、決して一人の手に成つたものではなく、平安朝の初期頃までに、誰が創めたといふことなしに自然に發達したものであら

空海

弘法大師、讃岐國(香川縣)の人、眞言宗の開祖、承和二年(西曆八四二年)六十二。

吉備眞備

奈良時代の漢文學者、右大臣、寶龜六年(西曆七四六年)八十二。

摸倣性
獨創性

本質

う。漢字から假名を發明工夫したのは、ひとへに日本人の摸倣性と獨創性との調和によるもので、世界に誇るに足る事實である。

以上の如く、我が國の文字は數と用法とに於て中々複雑であるから、これを改良しようといふ意見も起つて來るのであるが、長い歴史的發展を経て來たものであるから、さう急には改變も出來ない。従つて、我々はその文字の本質をよく知つて、これを正しく活用することに努力すべきである。

山村暮

本名土田八九十、
詩人、群馬縣の人、
大正十三年(三五四)
歿、年四十。

一六、なぎさ

山村暮 鳥

なぎさの砂は

ふるひにかけたやうにきれいだ。

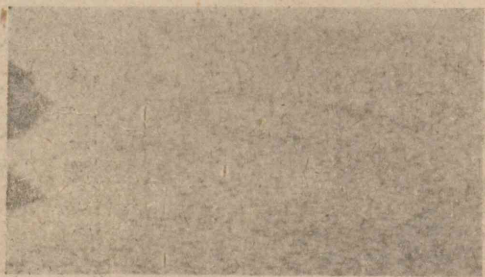
だれもみない

砂の上には、

小さな水鳥の足跡がある、

それがとほくまで

ならべたやうにつゞいてゐる。



その足跡をふんで、

これもまた、

かはいゝあかんぼの足跡がある。

きつと、

その水鳥をつかまへようとも思つて、

よたよたと出かけたのかもしれない。

だが、水鳥とあかんぼ、



それだけか。

それだけといふことがあらうか。

よく見まはすと、

おう、そこに

すこしはなれたところに、

これもはだしの足跡があつた。

あかんぼをきづかつて、



暮鳥詩集

山村暮鳥の詩集、
昭和三年（一九二八）三
月刊行。

あとからしづかに追ひかけた、

それこそ

そのあかんぼの

わかい母親のであらう。

にこにこした顔までがみえるやうだ。

（暮鳥詩集）



落合直文

宮城縣の人、國文學者、歌人、明治三十六年(三五三)歿、年四十三。

一七 現代短歌抄

落合直文

緋絨ばや

緋絨のよろひをつけて太刀はきて見ばやとぞ思ふ山ざくら花

時雨

大かたは掘りくづしたる貝塚の貝をぬらしてふる時雨かな

北原白秋

名は隆吉、福岡縣の人、歌人、詩人、明治十八年(三五五)生。

馬屋のうちに馬のもの食ふその音もかすかにきこゆ夜や更けぬらむ

金龍山淺草寺

東京市淺草區淺草公園にある、淺草觀音として名高い。

北原白秋

金龍山淺草寺の朱き山門の雪まつしるに霽れにけるかも

素足(素)秀

夏淺み朝草刈のわらべらが素足にからむ犬胡麻の花
枯れがれの唐黍の秀に雀ゐてひようひようと遠し日の暮の風

石川啄木

名は一、岩手縣の人、歌人、明治四十五年(三五七)歿、年二十八。

石川啄木

たはむれに母を背負ひてそのあまり輕きに泣きて三步あゆまず

ふるさとの訛なつかし停車場の人ごみの中にそを聴きにゆく

馬鈴薯のうすむらさきの花にふる雨を思へりみやこの

雨に



馬鈴薯

訛

金子薫園

名は雄太郎、東京市の人、歌人、明治九年(三三)生。

草市

閑院の宮家

閑院宮家、宮邸は東京市麴町區にある。

金子薫園

蓮の葉やみそ萩ぬらし雨すぎて銀河ながれぬ草市の上
に
くれなるの芽ざしあかるき閑院の宮家の林うぐひすの
啼く
夜の雨にしめる線路の石だたみとほく照らして電車は
きたる

吉植庄亮

千葉縣の人、歌人、農業を営む。明治十七年(三四)生。

手桶



汲みあげし釣瓶の水にさえざえし青き松葉もちりまじ
りたり
汲みて來し手桶ながらに飲ます水仔馬の腹に鳴りて満
ちつつ

若山牧水

名は繁、宮崎縣の人、歌人、昭和三年(五六)歿、年四十四。

若山牧水

摘草のにほひ残れる指先をあらひてをれば野に月の出
づ
飲む湯にも焚火のけむりにほひたる山家の冬の夕餉な
りけり

松村英一

松村英一
東京市の人、歌人、明治二十二年(三五)生。

若葉風夕しづまればいちじるく瀬の音ひびくふかき谷
より
暇なきわれをさびしと思ひつつをさな兒の頭撫でて居
にけり

正岡子規

正岡子規
名は常規、松山市の人、歌人、俳人、明治三十五年(三六)歿、年三十六。

くれなるの二尺のびたる薔薇の芽の針やはらかに春雨
のふる

島木赤彦

本名久保田俊彦、
長野縣の人、歌人、
大正十五年(三五六)
歿、年五十一。

瓶にさす藤の花房みじかければたたみの上にとどかさ
りけり

島木赤彦

山道に昨夜の雨の流したる松の落葉はかたよりにけり
高槻のこずゑにありて頬白のさへづる春となりける
かも

中村憲吉

廣島縣の人、歌人、
昭和九年(三五五)
歿、年四十六。

中村憲吉

端居
とほくし見ゆ
秋づく
コスモス



夏の土ふかく曇れりふところに蟬を鳴かせてわらべ行
きたり
端居よりとほくし見ゆる倉間のコスモスの揺れ秋づき
にけり

土屋文明

群馬縣の人、歌人、
明治二十三年(三五三)
〇生。

土屋文明

おほ母

ひさびさにかへり來れる村の上に低く大きく月いでに
けり
おほ母の家をわが家と住みつけてやすき子等かも月を
見てゐる
桐の葉の廣きをしきて兒はすわり母をもともにすわら
せにけり

土田耕平

長野縣の人、歌人、
昭和十六年(三六〇)
歿、年四十七
草まくら

土田耕平

草まくら旅にしあれば母の日を火鉢ながらに香たきて
をり
枕べの障子にひびく波の音おもへば遠き旅の宿なり

中郎秋香

静岡縣の人、國學者、御歌所寄人、明治四十三年(三七〇)歿、年七十。

樂翁

松平定信、磐城國(福島縣)白河城主、幕府の老中、文政十二年(一八〇九)卒、年七十二。

田安

徳川宗武、松平定信の父。

類焼す

落首

一八歌話

中郎秋香

一 とりゐ坂

樂翁公年十二にてなほ田安の邸におはせしころ、麻布鳥居坂なる戸川内膳の邸宅より火起り、その邊の町家類焼せしが、大火といふまでにもあらざりしかど、焼死せしもの多かりしかば、落首に、

この火事は人の命をとりゐ坂これより上のとがはないせん、

とありけるを、近侍の人々興じ笑ひて、「いかにもよく詠みたり。」と評し合ひけるを、君聞給ひて、「余が詠まんには、

奥醫師

まゐらす

すまふ

怪我

さはいはじ。とありければ、奥醫師の某「さらば何とか詠ませ給ふ。」と問ひまゐらするに、「言はじ、言はじ。」とすまひ給ふを、強ひて問ひまゐらせたりしかば、「四の句を、怪我のことなり。」といふべきなり。とあり。即ち、

この火事は人の命をとりゐ坂怪我のことなりとがはないせん、

となり。一句のことにて、一首の意味を全く顛動せしめ、過の已みがたきに出づるを明らかにせられしこと、まことに梅檀の二葉とぞいふべき。

二 あがたの宿

延享某の年の秋、江戸大風雨にて、市中處々の人家破

延享

櫻町天皇の年號。(二四四—二四八)

賀茂眞淵

國學者 歌人、遠江國(靜岡縣)の人、家を縣居と言つた、明和六年(西五九)歿、年七十三。

席(巾)

狼藉なる

沈思

會釋す

餘談に及ぶ

野分

天明

光格天皇の年號、(三四一三四)の火災はその八年にあつた。

損しけるあくる日、賀茂眞淵翁の許に門人某見舞に行きけるに、翁の家も夜來の風にて、屋根大方吹きまくられ、日光席にさし入り、屋根板狼藉なる中に、翁は平常に異なるさまもなく、机に倚りて沈思吟詠せり。「烈しき風雨にも候ひしかな」といふ聲を聞き、始めて某の來れるを知り、顧みて會釋しつゝ、餘談に及ばず、この嵐にて歌出來ぬ」とて、書きて示しける歌、

野分してあがたの宿は荒れにけり月見に來よ
と誰にいはまし

三 燒野の原

天明の火災にて、蘆庵が家危くなりし時、翁、人々に告

蘆庵

姓は小澤、尾張國(愛知縣)の人、歌人、享和元年(西一八)歿、年七十九。

鈔録本

太秦

山城國(京都府)、今京都市右京區。

内裏

内(人)

炎上す

未明

玉しきの庭



小澤蘆庵

げて、他の品は皆焼きても苦しからず、たゞ書籍だけは

一冊も多く出し給はれ」とて、自身も年來の鈔録本を風呂敷包にし、これを負ひて、太秦のしるべの家へ避けぬ。この火にて内裏も炎上せし由聞き、いたく歎きて、翌日未明に太秦を出で、内裏の燒跡を

拜したてまつりて、

けさ見れば燒野の原となりけりこれやきの
ふの玉しきの庭

(新説歌がたり)

姉崎嘲風

名は正治、京都市の人、宗教學者、文學博士、東京帝國大學名譽教授、明治六年(三五三)生。

第一時世界大戦時

一九二〇年の母

姉崎嘲風

塹壕 塹(土) 道(土) 已(既) 飛(飛)翔(羽) あはれ 捜探

英國の一飛行士官が敵の飛行機を射落した時のことである。彼は敵機の地上に落ちるのを見たと共に、それに乗組んでゐる敵兵のことを思ひ、敵の塹壕前であるにも拘らず、敵機の跡を追うて著陸した。敵機は翼を折つて壊れ、乗組士官は地上に横たはつて倒れ、呼吸は已に絶えてゐた。敵ながら今まで空中に飛翔してゐたことをおもひ、あはれを覚えて、その死骸を片付けてやらうとして、胸のポケットの邊に手を觸れると、そこに堅い物がある。それを捜し出して見ると、一葉

一入 催す

武運めでたく



空中戦

の寫眞で、それには「汝の母」と書いてある。即ち今戦死したドイツ士官は、空中戦にも常にポケットに「汝の母」の寫眞を藏してゐたのである。英國士官はこれを見て「一入あはれ」を催し、まづ敵の死骸を味方の塹壕に運び、再び機上の人となつて又一戦した。かくて武運めでたく安全に味方の戦線の後に歸つた。

その夜、英國士官は、その日射落した敵とその老母と

感慨に堪へず

大略

のことを思ひ、それにつけては、自分の身の上、且ははや
く亡くなつた自分の母のことを考へて、感慨に堪へず、
敵士官の住所、姓名によつて、その母へ一書を送つた。
その意味は大略次のやうであつた。

母御

「私は英國の飛行士官です。今日、私は敵機たる
ドイツの一飛行機を射落して、自分には一つの功
名を立てましたが、その敵兵が死ぬまで母御の寫
眞を大切にポケットに藏してゐたのを發見し、そ
の母御たるあなたにこの手紙を差出します。
私はあなたの御子息を射落しました。しかし、
御子息を憎んでのことでもなければ、また御子息

義儀議

偵察

無量の感

の母御たるあなたのお悲しみを知らないでもな
いことは勿論です。たゞ祖國のため果すべき私
の義務だつたのです。敵士官、即ちあなたの御子
息が味方の陣地を空中から偵察して無事に歸ら
れましたなら、その結果、味方は必ずやそれだけの
攻撃を受けて、味方の兵何人かの生命はそのため
に失はれたでせう。この不幸を防ぐため、私は敵
機を射落しましたが、その乗組士官の死骸に敬意
を表し、それを取片附けようとする時、その人の母
御たるあなたの寫眞を發見して、無量の感に打た
れたのです。

とし

私は子供の時、母に死別れ、今でも母親のある人を羨ましく思ふのですが、その私が射落した敵士官には、あなたといふいとしの母親がゐられ、死ぬ迄あなたの寫眞を抱いてゐられたのを見て、私はじつとしてゐられない感じがします。御子息は已にこの世の人ではありません。あなたもこの知らせを得て、今頃はさぞ悲痛に沈んでいらつしやるでせう。御子息を殺した私が、あなたに手紙を差上げるのは、残忍だとお思ひでせうが、しかし、私としては、あなたに對して、丁度自分の母に對するやうな親しい感じを禁ずることが出来ません。

悲痛

私は御子息を射落しました。しかし、今私があるたの寫眞を前に置いて、あなたにこの手紙を書くときには、亡き御子息があなたに向かつて話をしているのか、また、私が自分の亡き母に向かつて手紙を書いてゐるのか、わたくしには區別がつかず、筆先に涙がはら／＼と流れるばかりです。

私が御子息を射落したのは、軍人としての義務を果したのです。あなたも、亦亡くなつたあなたの御子息も、このことはよくお分りの筈だと思ひます。そしてまた、御子息の亡くなつた代りに、私は一人の母を得たやうな思をしてゐることも察

顫 震

中立國

していたゞけると思ひます。今私の書くこの手紙は、御子息と私と二人の魂が一緒になつて書くのだと思つて下さい。もうこの上は何も書けません。涙で目は曇り、筆執る手も顫へて書けませぬ。」

この手紙は、英軍の本營から中立國の手を経て、ドイツ國內の宛名の人に届いた。一人の兒を失つた母がこれを讀んだ時の感じは、思ひやるさへ涙の種である。さて、この婦人は數日の後、長い手紙を書いて、あの英國士官へ送つた。その大意は次のやうであつた。

「お手紙の著く前に忼の戦死は知つてゐました

述 懐
却 反
蘇 生

が、その戦死の相手たるあなたの情深いお手紙を見た時の私の思をお察し下さい。通常ならば、あなたを忼の仇としてお怨み申すところですが、御述懐に接しては、その仇が却つて忼の蘇生となつて、この母に手紙を寄せてくれたやうに思はれます。あなたが忼の懐にあつた私の寫眞に對して、亡き母御に對する心持がするといはれるやうに、あなたのお手紙は、私にとつては討死した忼の手紙としか思はれません。あなたは忼を殺したといはれ、また事實それに違ひないことは勿論知つてゐますが、討つも討たれるも、ともに各の祖國の

因縁

ためです。かうして仇といふべきあなたが私を母の如く思ひ、私にも亦あなたが死んだ悴の身代りのやうに思はれるのは、何たる不思議な因縁でせう。

私には三人の男子がありまして、戦死したのはその末子ですが、兄二人もやはり戦場に出てゐて、いつ弟と同じ運命に陥るかわかりません。しかし、私は末子の戦死したために、あなたといふ新な子を得ました。戦争が済んで平和の時が来、そして、兄二人も無事に歸つて来ましたら、私はあなたにこの家へ一度来ていたゞきたいと思ひます。

光あれ

姉崎正治著、感想
論文集、大正九年
（三五八）五月刊行。

二人の兄もあなたを弟と思つて迎へるでせう。その時には、あなたは死んだ悴とあなたと二人分の子として、弟として、私の家庭にいつまでも滞在していたゞきたうございます。私はその日の早く来るやうに神に祈つてゐます。」
そして、最後には、あの寫眞に書いてある通りに、汝の母と書いてあつた。

（光あれ）

大佛次郎

本名は野尻清彦、
神奈川県の人、小説家、明治三十年
(三五)生。

エンヂン

發動機、英語。

プロペラ

推進機、英語。

轟音

二〇空の紀行

大佛次郎

びゅーん……といふエンヂンの廻轉する音が急に、宙に一杯になる。附近の青草が一度に根元から後に倒れて、迅く細かく、わな／＼顫へ出す。水になつて流れ出したやうな工合だ。翼の側に立つてゐた人の背廣の上著が跳ね上り、誰かのカン／＼帽が見事に宙に飛ぶ。プロペラが凄じい勢で廻り出したのだ。K飛行士がちよつと手を舉げて合圖した。

聲はエンヂンの轟音に消されて全く聞えないが、萬歳を叫んでゐるらしい見送の人達の澤山な顔が、無數

人波

がす

濃霧の俗稱、英語
ではない。

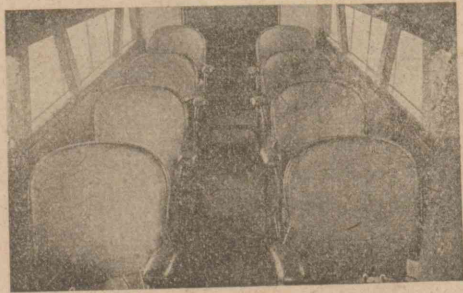
白夜

直覺

贅澤な

贅(頁・十一畫)

の手が、振る小旗が、窓硝子の面に流れて後方へ廻る。友人の顔が時々見える。僕等は目で合圖しあふ。その朝子の外はからつぽだつた。その朝の東京を罩めてゐた灰色の「がすが」、太陽の姿も見えない空を蔽つて、白夜のやうに灰色に濁つた宙である。おや、昇つた！ といふよりも、直覺では、僕が深々と腰掛けてゐるスチンソン機の、贅澤な緋色の革張の座席の下で、地面の方が下へ靜かに退却して行つて、機だけが宙に残つた



飛行機の座席

捨身
度胸

隅田川

荒川が東京市内を流れて東京灣に注ぐ部分の稱。

途端に

築地

東京市京橋區にある。

本願寺

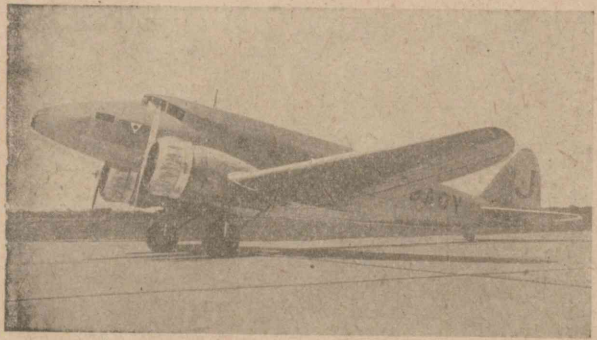
西本願寺の別院。

クリスマス

耶蘇降誕祭、十二月二十五日に行はれる。

のだ。慌てて首を伸ばして下を見る。僕は捨身に近

い度胸を据ゑてゐたので、どんな瞬間にも目を明けて見てゐる決心でゐた。



旅客機

いてある。「小さいな、は、あ、飛行機が高い處へ來て

大きく緩く地面が動いてゐる。掘割埋立地、整然と居並んだ人家、隅田川の川幅と橋。「あいつは電車だ。」かう思つた途端に、築地の本願寺が、ずつと下に、クリスマス

の裝飾菓子のやうに行儀よく置

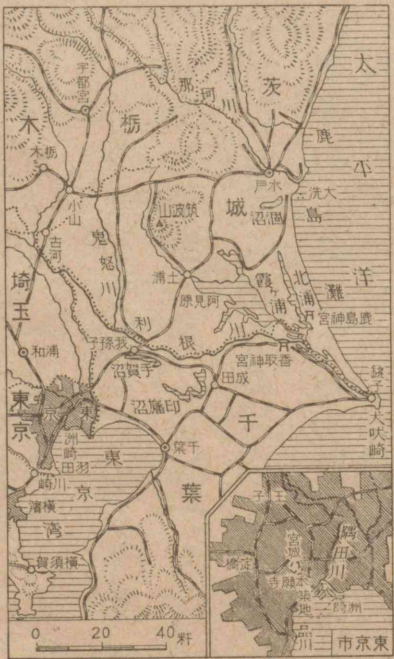
大川
隅田川の別稱。

ゐたのだ。」機は大川の川口の空を横切つて行く。水に浮いた無数の舟、河岸を走つてゐる蟲のやうな自動車、歩いてゐる人。

「おや、田圃がある。をかしい。これ

は確に何處かで見
た圖だ、始めてでは
ない。」さうなのだ。
新聞で見たいろいろ

ろの航空寫眞——驚かない筈だ。なるほど一應の概念だけは、今の新聞を見る人なら持つてゐる。かうし



て實際に空を飛んでみなければ、あの種類の寫眞に出て来る町や人家の小さいことを、全然想像することが出来ない。

豆粒、といふよりも小さい。ポケットからピンセットを取出して、右の家と左の家とを軽く挟んで置換へる。そんな悪戯氣さへ誘ひ出されるくらい小さい。全部のものを載せてゐる地面が緩慢にあとずさりして行く。スピードの感覺など更にない。機は空に樂樂と浮いてゐるだけではないか。

「飛行機が來てゐる。」と、隣席に腰掛けてゐるM寫眞部長が注意してくれる。なるほど横手の宙にほかんと

緩慢に
慢—漫
スピード
速度、英語。

フィルム
寫眞機の感光膜、
英語。

手賀沼
千葉縣の西北部に
ある、周回約三五
軒。

印旛沼
千葉縣の北部にあ
る、周回約七〇軒。

浮いてゐる。見送の飛行機だ。M氏は窓を明けて、活動撮影機の狙を附ける。僕も半分くらゐの大きさのフィルムを向ける。見る間にこちらの方が迅くなる。「やはり駛つてゐるんだなあ。」と納得する。

「手賀沼！」K氏がどなつてくれる。薄くなつた「がす」の底に沼が光つてゐる。思はず時計を見る。まだ飛翔後五分と経つてゐない。K氏は上體を廻して高度計を渡してくれる。僕は針を讀んで、「手賀沼、六〇〇米。」と、悠々と手帳に書きこみ、地圖と相談する。地圖にある印旛沼を探すと、手賀沼の向かふに明かるく光つてゐる。その邊から行手一面の空には日が當つてゐる。

J O A K
東京中央放送局。

筑波山

茨城縣にある、高さ約八七六米、山上は男體と女體との二峯に分かれてゐる。

霞ヶ浦

茨城縣の南部にある、周回約一五〇

洲崎

東京市深川區にある。

盤(皿)

るらしい。J O A Kから今日の飛行は快晴を約束されてゐる。

「樂だなあ。」と僕は左手にもう現れて來た筑波山の山塊を、自分が仙人になつたやうな心持で眺める。

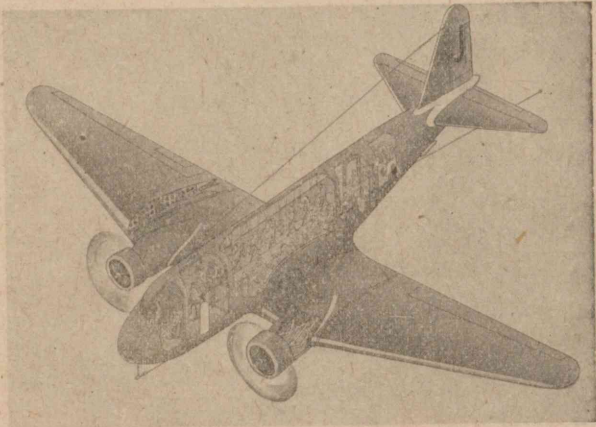
高度計は九〇〇米。霞ヶ浦だ。洲崎から十分。海軍の飛行機が、明かるく日の當つてゐる水の上で、銀の蜻蛉のやうに、翅を休めたり飛上つたりしてゐる。沼の面も銀盤のやうに白く光つてゐる上に、蜻蛉も銀細工のもののやうに、動く度に翅がきら／＼光る。

筑波は左側に在る。少し前まで横顔を見せてゐたものが、何時の間にか眞向かひの姿となつて、男體・女體

のはつきりと分かれた二つの峯も、山腹から上は薄い

朝霧の中にあるのが、見てゐる内に後へ逃げて行くやうだ。

機の下にある麓の平野は朝の光に輝いてゐる。此の廣い眺望のうち、に投込まれれば、山も野も小人島の景色になる。僕は雲の上に首の出てるガリヴァーだ。鶯



旅客機の内部

色をして小切を綴り合はせたやうな島箱庭のやうな

ガリヴァー

英國人スウィフト(西暦一七五五)著の諷刺小説ガリヴァー旅行記の主人公、印度への航海中小人國に漂着したことがある。

箱庭



村落平野の上に縦横に線を引く道路。道路を走つて
ゐる自轉車が動く影となつて僅かに見える。歩いて
ゐる人間のシャツの色らしく光る白色の點、點。森の
くつきりと黒い影。眺望は實に明かるい。高度計は
一〇〇〇米。

ハンドル
把手、英語。

沼
ひぬま
濁沼を指す。

K氏が無造作にハンドルを離して腰を浮かせ、背廣
の上著を脱ぎにかゝる。操縦席に坐り直しながら前
方を見詰めて「水戸」といふ。大きな沼が見える。水は
黒い。すぐその向かふの草野の上に、町が鼠色に廣が
つてゐる。時計を見ると八時二十八分。高度はまた
一〇〇米昇つて一一〇〇米。沼の上。八時二十九分。

那珂川

栃木縣那須山に發
し茨城縣に入り鹿
島灘に注ぐ、長さ
約一二六軒

匂

大洗

水戸市の東南約一
四軒にある、海水
浴場。

水戸は沼からまだ遠い。それから一分、いよいよ水戸
市外。周圍を道路で圍んだ池のやうな沼。すぐと町
の上空だ。八時三十一分。高度はまた一〇〇米昇つ
て一二〇〇米。那珂川が海へ注いでゐるのが見える。
海は鈍い銀色で、水平線は見えない。縣廳らしい何階
もある四角い建物。玩具だ。電車が匂つてゐる道路。
那珂川上空。川口の海に音のしない磯波が立つてゐ
る。松らしい林が海岸に並んでゐる。大洗だらう。

薄田泣菫

名は淳介、岡山縣
の人、詩人、隨筆
家、明治十年(三三)
年生。

二 秋の小天使

薄田泣菫

一

懶い
窄(穴)
所在ない

「ひん、かち。——ひん、かち。……」
閉て切つた障子に秋の陽が明かるくあたつてゐる
午後三時過ぎ、懶さうな蟋蟀の歌に混つて、ふとこんな
聲を私は聴きつけた。それは、誰もがひとり、ぼつちの
心寂しい折に、われ知らず、唇を窄めて吹く口笛のやう
な、弱い、かすかな、所在なささうな聲だつた。
私はもしやと思つて、机の前を離れて、そつと障子を
開けてみた。私は一目でその聲の主を見つけること

胡麻鹽
胡(肉)
差毛
一著に及ぶ
恰幅

最肩筋
披露する
御無沙汰



鶉

が出来た。それは胡麻鹽の頭と金茶の胸毛と眞黒な
翼とを持つた小鳥で、兩肩のあたりに眞白な差毛が際
立つて光つてゐるので、まるで紋付羽織でも一著に及
んでゐるやうな恰幅だ。
「ひん、かち。——ひん、かち。
——ひん、かち。——」
小鳥は長い旅に出てか
ら半年振りに歸つて来た
ので、そこらの最肩筋へその由を披露し、かねてまた、そ
の間の御無沙汰を詫びてでもゐるやうに、その一節ご
とにひよくりくと、老人めいた胡麻鹽の頭を下げて、

こくめいに

こくめいにお辭儀を繰返してゐる。
「やつぱり鵜だつたな。彼奴もうやつて來てゐるのか。」

私は口の中で呟いた。この時、小鳥は初めて私の姿に氣づいたらしく、お辭儀を半分ししたまゝ、眞黒な顔を傾げて、きよろ／＼と私の方を見守つてゐる。

二

秋はその尖鋭な緊張し切つた氣力を、鵜の先驅者である鴟の、あの小英雄的な負けじ魂の中に植ゑつけてゐる。私が今年の秋初めて鴟の鳴聲を聞いたのは、九月の十三日だつた。それは朝のことであたりの立木

しさを

尖鋭な
先驅者
先(九)

痲
颯たる

餘熱
潑刺たる
明徹な



鴟

の第一の梢で、元氣よく長い尻尾を振廻しながら、「き、き、き、き……」と、痲の高い強い聲で高鳴きしてゐる颯たるこの鳥の姿を見た時には、その瞬間、そこらにごちやごちやと立ち並んでゐる工場の赤い屋根に、土塊のから／＼に乾いた黍畑の畔に、牧場の番小屋に釣りつ放しの蚊帳に、素足で地べたに立つてゐる私の蹠に、まだそこばく残つてゐた眞夏の汗臭い餘熱は一氣に跳ね飛ばされて、初秋の潑刺たる健かさと明徹な冷つこさとが、そこらにふりか

隱遁
隱(下左・阜)

かるやうに感じたものだ。

秋はまた閑寂と隱遁とを楽しむ心を鷓鴣のあのくすぼつた小さな胸のなかに産みつけてゐる。鷓鴣は



鷓鴣

鳴におくれて、木の葉がすつかり枯落ちた頃、こつそりとやつて来る孤獨者で、どんな場合でも彼は道連を伴はない。「寂」の詩人

芭蕉

松尾宗房、伊賀國三重縣の人、俳人、元祿七年(三三)巳歿、年五十一。

孤寂

芭蕉もさすがに秋の寂しさにはこらへきれないで、「こちら向けわれもさびしき秋のくれ」といつたが、鷓鴣はその魂に沁透る孤寂が何よりも好物で、自然が噓一つ

陰濕な

人懐こい

愛嬌

愚直

愚(心)

渥丹色

豊穰
豊(豆)

しても、けし飛んで無くなりさうな小さな體で、絶えず寂をもとめて、陰濕な物陰をと捜し歩いてゐる。

この二つの小鳥に挟まれて、十月のなかば過ぎにひよつくりと訪れて来る鷓鴣こそは、日和續きのこの頃にふさはしい來客で、人懐こいこの鳥は、到るところで持前の愛嬌と愚直に近いまでの人の好さとを振撒いてゐる。この頃になると、そこらの木の實はそれ、黄金色に、また渥丹色に熟み爛れ、草の實はふくらみきつた莢からおのづと爆ぜ割れて、そのはずみにびちりとかすかな音を立てて、廣い外界へと飛出してゐる。どこを見ても豊穰と成熟と收穫との季節だ。

蜂は蜂で、正午前後のほか／＼と暖い頃を見はからつて、もう一稼ぎだ。あとは長い休息だ。と、元氣よく巢から飛出し、残りの花に蜜を求め歩いて、頭のとつぺん



雀 十 四

を黄いろい花粉だらけにしてゐる。 糞蟲はまた早くから枯つ葉で縫綴くつた草庵のなかに隠遁生活を送つてゐたが、この二三日暖い上天氣が續くと、すっかり見限つてゐた世間の事々がまた思ひ出されるらしく、一旦閉て切つた草庵の小窓から眞黒な顔を出して、きよろ／＼とあたりを

草庵

座方
はしやぐ
ちよこまかと
こましやくれる
身のこなし

これ見よがしに

見廻してゐる。

程近い岡の上では四十雀が、輕業師の一座のやうに、大勢の小さい座方を引連れて來て、騒々しくはしやいでゐる。座方の小坊主連は、ちよこまかと、こましやくれた身のこなしで、そこらの立木の小枝につかまつては、てんでに習ひ覺えた得意の藝をこれ見よがしにおさらひをしてゐる。あるものはとんぼがへりを、あるものはまたぶらんこを、といつたやうに。

三

誰も彼もが氣忙しさうに動いてゐるなかへ、ひよつくりと歸つて來た鶉は、持前の人の好さから人家の垣

根近くに紛れ込んで、

「ひん、かち。——ひん、かち。」

と、低い調子で歌ひながら、金茶の胸當に紋附羽織の著附で、弾機細工か何かのやうに愛嬌たつぷりにびよこびよこと胡麻鹽の頭を下げどほしに下げてゐる。

相手が誰であらうと頓著なく、よしどんな害心をもつてゐる悪戯者に出會はさうとも、同じやうな心安さで挨拶せずにはおかない。この鳥の慇懃さを見て、世間の人々、わけても農民達は、

「彼奴、俺を見て、べこく、お辭儀をしてくさる。伯父貴とても思つてゐるのか知ら。馬鹿鵯だな。」

弾機

よし

戲(戈)

慇懃さ
慇(心)

伯父貴

綽名

あさはか過ぎる

いたくしい

と、こんな失禮な綽名をつけて、ともすればこの小鳥を馬鹿者扱にしようとする。だが、それは人間のあさはか過ぎるまちがひで、持つて生まれた人の好さから、世間はすべて善意に満ちてゐて、誰一人害心を持つてゐるものがあらうなどとは思つてはゐない。この紋付羽織の小坊主は、誰彼の分け隔もなく友達づきあひに愛嬌を振撒いてゐるのだ。あの金茶色の胸毛に包まれた、小さな魂のいたくしいまでの善良さを、少しでも傷つけるやうなことがあつては、人間にとつて大きな恥辱だと言はなければならぬ。

この鳥の性のよさを分からうとするには、別にむづ

はづす

かしいことは入らない。若しかこの鳥に出會つて、
「ひん、かち。——ひん、かち。」
と胡麻鹽の頭を下げて挨拶をせられたら、その場をは
づさず、こつちからもまた、

「ありがたう。——ありがたう。」

とても言つて、丁寧に頭を下げて挨拶を返してやるこ
とだ。——といふと、大抵の人は笑に紛して、

「そんな馬鹿げたことが……」

と言ふにきまつてゐるが、人は自分自ら馬鹿になつて
みなければ、愚直さやお人好のどんなに尊く有難いも
のだからといふことが解らう筈はないのだ。

獨樂園

薄田泣菫著、隨筆
集、昭和九年（一九
三九）四月刊行。

（獨樂園）

若山牧水

（一一一頁参照）

萩



坪谷村

宮崎縣東臼杵郡

巍峨たる

取著き

彎曲する
彎（弓）

三 萩の原

若山 牧水

私の生まれた家は、東と北とに山を負ひ、前に溪を控
へた坪谷村字石原一番戸といふのであつた。溪を距
てた向側は、また巍峨たる險山となつてゐる。その部
落と東隣の部落との間には、少しの間人家が斷えてゐ
て、和田越といふ小さな峠を越して來ると、先づ私の家
が取著きとなり、そのまゝ溪に沿うて、疎に西へ細長く
總戸數二十二戸かある石原村となるのであつた。西
の方から白々と瀧のやうな長い瀬になつて流れて來
たその溪は、丁度私の家の眞下で大きく彎曲して、そこ

背戸口

だけ深い淵となつてゐた。二階からはその大きな淵が一面に見下されて、月の夜などは特に好かつた。

家の背戸口からすぐまた他の小徑がついてゐて、背後の小山を越すやうになつてゐた。それを越すと、そこにはまた別の溪が流れてゐて、それからそれと、幾つとなく折れ重なつてゐる小さな山脈の間に、その溪谷だけの流域ともいふべき比較的平かな一區劃が出来てゐた。元來が極めて平地に乏しい山地のことで、その溪の両側など、かなり克明に手を著けて、小さいなり田なり畑なりに開墾せられてあつたが、それでも、まだ山ともつかず、森ともつかぬ灌木林風の荒れた平野

一區劃

克明に
克(兀)

灌木林

物心のつく

が澤山残つてゐた。不思議なことには、この溪ぞひには人家といふものが一軒もなかつた。私の物心のつく頃になつて、四國者だといふ夫婦が來て、初めて一軒の小屋を建て、瓦焼を始めたのであつたが、今でも續いてゐるかどうかと思ふ。

雑木
雑(佳)

この溪ぞひの灌木林に、秋になればよく栗が落ちた。他の雑木は少し大きくなれば悉く木炭に焼いてしまふが、栗の木だけは駄目なのださうな。その栗を拾ひに、私たちはよく出かけた。點々として立つてゐるこの栗の木の周圍が、今考へれば殆ど萩だつたらしく思ひ出される。ほんとに深い萩の原であつた。萩ばかり

ほんと(ほんたう)

咲きしだれる

りではなかつたらうが、到る處の雜木に、灌木に、このこ
 まかな木の混つてゐない處は無かつた。身を屈めて
 落葉の間に落ちてゐる木の實を拾ひながら、時々腰を
 伸ばして見廻せば、必ずのやうにそこらに咲きしだれ
 てゐるこの薄紅の花びらが眼についた。萩といつて
 もなか／＼大きい。しだれて咲いてゐるのですら、子
 供の私達よりも遙に丈が高かつた。よく熟してゐな
 い栗に出逢ふと、その木に登つて枝を揺動かしながら、
 まだ青いやうな實を落して取つたものだ。梢から下
 を見ると、萩が茂つてゐて、そこに待受けてゐる友達の
 姿など見えはせぬ。「いゝか、落すぞ！」と呼びながら、力



一ばい枝を揺ると、その茂みの中へ、ばら／＼と音を立
 てて青い毬が落ちて行つた。
 この原には茸もよく生えた。大抵栗の落ちるのと
 あとさきで、栗をつめた手籠の上に、見事な「しめぢ」や「ね
 ず茸」を載せて歸つたものだ。茸のある處は栗より範
 圍が廣いので、探すのに骨は折れたが、それだけ楽しみ
 であつた。それに私は、友達大勢とかういふことをす
 るのが嫌で、大抵は自分一人か、乃至は母と一緒に
 であつたので、いつもひつそりと、その廣い雜木の原を
 屈みながら探して歩いた。萩のほかには女郎花が最
 も多かつた。林が伐開かれて明かるくなつてゐる草



男郎花

淀み



鮭

原などには、この花が高々と茂つて咲いてゐた。白い花の男郎花といふのもまじつてゐた。なほ私の忘れられないのは、この原のあちこちに流れてゐる小流で魚を釣る事であつた。それは溪ともいへない位小さな流で、大抵一尺か二尺の幅で流れてゐて、それがそこゝで小深い淀みを作つてゐる。その淀みに棲む魚を釣るのである。勿論流の上には藪が掩ひがゝつてゐるので、竿とても二尺か三尺の長さのものしか使へなかつた。人といふものを知らぬ魚なので、なかゝよく釣れた。種類はきまつてゐて、鮭か「あぶらめ」といふ小魚、どうかすると蟹や鰻などの出

あぶらめ



聰しい
聰總

てゐることもあつた。いつといふこともなかつたらうが、この釣の記憶も必ず秋の季節に係つてゐる。岩から岩を濡れながら這歩いて釣つてゐると思ひがけぬ見事な栗が、その淀みのなかに落溜つてゐることなどもあつた。折々眼を上げると、その流の上には例の花がしつとりと咲垂れてゐる。朗な秋の日は背に流れて、どうかすると、その溪間の空にはほの白い晝の月の懸つてゐるのを見ることもあつた。水でも飲みに来てゐたのか、野兎の子の聰しい眸が、不思議さうに岩の陰からこちらを覗いてゐたこともあつた。私は十歳の時限り、殆ど離れ切にこの故郷を離れた

といつてもいゝ。その後稀に歸ることがあれば、必ずこの原に出かけて行つたが、その時ごとに、幼い頃の記憶とは似もつかぬ狭苦しい原であるのに驚かされた。見廻せばいかにも萩が茂つてはゐたが、心のなかの記憶の原は、行けども行けども果しのない廣い原で、到る處に萩が咲き、栗が實のり、水が流れ、有明月が懸つてゐる、さうした原であらねばならなかつた。不思議とまたさうした原の實在が信ぜられてならぬのである。夏も末萩の花の綻びかける頃になると、私は必ずのやうにこの原の幻を心に新にするのである。

（比叡と熊野）

有明月

實在

比叡と熊野

若山牧水著、紀行文集、大正八年三月と五月刊行

松平豆州信綱

松平伊豆守信綱、武蔵國川越の城主、江戸幕府の重臣、寛文二年卒、(1703)年六十七

代官

野火留

埼玉縣北足立郡大和町野火止

黄金一兩



公儀

十六里

約六十四軒

溝洫

三三 用水

松平豆州信綱の代官に安松金右衛門といふあり。豆州の領分、野火留といふ所に、武州多摩川の流を引きたらんには、開發の田地もあるべきや否やと、これを議せられしに、いかにも宜しかるべき由を申す。およそ黄金三千兩を費すべきにやと有りしかば、豆州聞きて、「我、此の所を領すとも、又いづかたへ移りなんも知らず。我が三千兩の黄金を費して、永くこの地の利あらんこと、かつは公儀への奉公の一つなり。」とて、安松に命じて多摩川の水を引かんとて、十六里が程溝洫をうがちて

新河岸

埼玉縣八間郡の北部を東南に流れ荒川に注ぐ。

なにさまにも

新河岸しんがしと言ふにいたりたり。

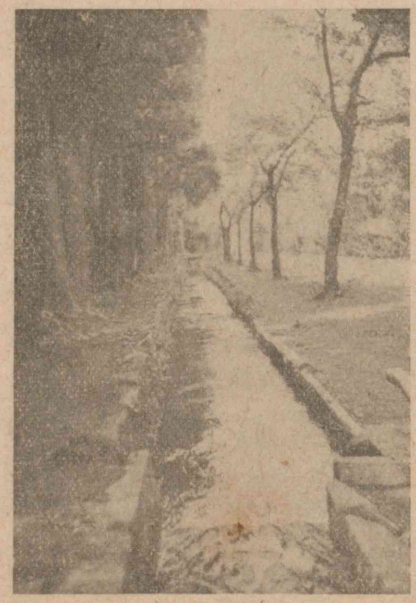
かくて水流れ入るかと待つに、更に水來らずして一とせを経たりけり。豆州安松を召して、「いかで水は入らざるぞ。」と有りしに、「いかにも水は入るべきにて侍る。なにさまにも故ありぬと存ず。」と言ふ。「その故いかに。」とありしかば、「いまだそのよしをば心得侍らず。」と答へけり。

又の年にも水入らず。また安松を召して尋ね問はれしに、「さりとは入るべきものに候へども、かくのみ侍ること返すべし。不審に候。たゞこの地は武藏野にて侍れば、およそ川越の城下の人家、常には疊の上に柿紙

川越 埼玉縣川越市。柿紙 柿澁をひいた紙。

請す

などを敷きて、客來れば、これを巻きて、さて請じ侍る。これ、地かわきて、しかも風常に荒れ、忽ちに座中塵埃に埋れ侍る故なり。然るに、今年は城下の塵埃むかしの



野火止の水用

様に侍らず。殊に武藏野に植侍りしは、たけもの、今年程豊に候ふ事、つひに覺え侍らず。多摩川よりこの溝に流れ入る水を、廣き野に引侍る故に、いまだ流れ來る程の事は侍らぬにや。この水、廣野にみちく、たらん後は、

かならず流れ来るべきものと存ず。」と答ふ。羽生又右衛門といふ代官こゝらをつかさどりければ、やがて召尋ねられしに、「されば今年ほど野に植ゑし萬づのもの、豊なる事は覺え侍らず。」と申ししかば、豆州またのたまふ事もなし。

又の年にも水來らず。この時、安松を召して尋ねられしかど、去年の如く答へてければ、「汝が地の高下を審にせざるが故に、水流るゝに堪へざるにあらずや。」と言はれけれど、驚く氣色もなし。

三年といふ秋、大雨の降れる後に、雷の鳴るごとく、水音おびたゞしくとゞろきて、この溝にあふれみち、平地

六七寸
凡そ二十程

修す

神妙に

遺老物語
朝倉景衡（新井白石の妻の弟）が故老から逸事・逸話を聞き書したもの、寫本二十冊。

をも水行くばかりにて、六七寸ばかりある鮎の流れくる事おびたゞしく、只ひと時に十六里が程に流れわたり、新河岸の川に流れ入りてけり。
さるほどに田地もひらけて、野火留二百石の地、忽ち二千石の地となりぬ。豆州、安松を召して、「この年頃、汝を責めたりけるに、つひに驚くことなく、重ねて溝を修し、なんとせざる事神妙に見ゆるものかな。」とて、一倍の祿賜はりて三百五十石になされたり。その後次第に經あがりて、高き職をもつかさどれり。

〔遺老物語に據る〕

室鳩巢

名は直清、江戸の人、儒學者、享保十九年(三九)歿、年七十七。

翁

作者室鳩巢自身をさす。

邪僻妄誕

邪(下)邑(妄)女

かしがまし

女郎花の云々

秋の野になまめき

立てる女郎花あな

かしがまし花もひ

と時。(僧正通照)

古今集

未練

列子

列禦寇、支那周代の賢者、「列子」はその著作といふ、八篇。

二四百年の計

室鳩巢

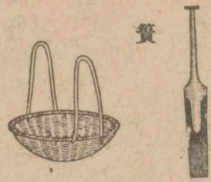
一 愚公が山

翁が心は、知己を一世に求むるにも候はず。昔より、邪僻妄誕にして、根もなき事の盛に世に行はれて、かしがましく聞ゆるは、げに女郎花の一時とや申すべき。大方は續かぬものにこそ。世を歴て正道に返らぬはなし。然るを、心短くして早く驗を見むと思ふは、未練の事と謂ふべし。
諸君、列子が書を見給へりや。「愚公といひし人あり

家居

耒耜

簣



寓言

けるが、家居近く山のありしを厭ひて、わきへ移さむとて、日々に子供引具し出でつゝ、手づから耒耜を執りて、一簣づつ毀ちとりけるを、智叟といひし人これを見て、『かく大いなる山を、僅かなる人の力にて毀てばとて、毀ち盡くさるべきか。』と其の愚さを笑ひければ、愚公聞きて、『わが代より毀ちそめて、わが子の代にも繼ぎて毀ち、わが孫の代にも、又其の子の代にも繼ぎて毀ちなば、つひにはわきへ移さぬことやあるべき。』といへば、いよいよ笑ひけり。となむ記し置きける。もとより寓言なれば、この人あるにはあらねども、愚公がいふやうなる事は、世に愚なりといへば、愚公と名づけ、智叟がいふやう

ならし

なる事は、世に智なりといへば、智叟と名づけけるならし。

凡そ天下の事、愚公の心ならば、遅くも一たびは成就すべし。然るに、世に智ありと稱する程の人は、大方智叟が心にて、愚公が山を移すやうのことを聞きては、その愚を笑ふ程に、何事もその功を成就せぬなるべし。

然れば、世のいはゆる愚は反つて智なり。世のいはゆる智は反つて愚なり。それ故に、禦寇が世を諷してこそかくはいひつらめ。

今、翁も百年論定まるの日を身後に期し侍れば、世の明智なる人より見ては、翁が迂濶なる事を笑はるべし。

迂濶なり

諷す

いはゆる

程に



老僻む

接木

忍が岡・谷中
東京市上野公園の地

かたへ
寛永

後水尾天皇、明正
天皇の御代の年號
(1624—1644)

將軍家
三代將軍家光

鷹狩
過ぎがてに
思ほえず
渡御

されど老僻めるにやあらむ、此の志を守りて身を終へなむとこそ思ひ侍れ。愚公が山を移すの類なるべし。

二 老僧が接木

忍が岡のあなた谷中の里に、何がしの院とて一つの眞言寺あり。翁いとけなかりし頃、其の住僧を知りてしばし寺に行きつゝ、木の實ひろひなどして遊びしが、住僧かたへの人に對ひて、前住の時の事をなむ語りしを聞侍りしに、寛永の頃の事になむ、將軍家谷中わたり、御鷹狩のありし時、徒歩にて此處や彼處御過ぎがてに御覽ましましけるが、此の寺へも思ほえず渡御あり

八旬
みづはぐむ
なかく
やむことなし
御事
はしたなし
いらふ
心なきこと

しに折節其の時の住僧は八旬に及びて庭に出て、みづはぐみつゝ手づから接木して居けるが御供の人々後れ奉りて御側に二人三人つき奉りしをなかくやむことなき御事をばおもひ寄らねばそのまゝ背き居たりしを坊主何事をするぞと仰せられしを老僧心にあやしと思ひていとはしたなく接木するよと御いらへ申ししかば御笑ありて老僧が年にて接木したりとも其の木の大きになるまでの命も知難し。それにさやうに心を盡くすことの不用なるぞと上意ありしかば老僧御身は誰人なればかく心なきことを仰せ給ふか。よくおもうて見給へ。今此の木ども接ぎておき

黒む
強ちに
御紋
徳川氏の定紋三ツ
葉葵
御紋
御物
舊學
舊學
正學



なば後住の代に至りて何れも大きになりぬべし。然らば林も茂り寺も黒みなむと我は寺の爲を思うてする事なり。強ちに我が一代に限るべき事かはと言ひしを聞き召して老僧が申すこそ實にも理なれと御感ありけり。その程に御供の人々追々來りつゝ御紋の御物共多く集ひしかば老僧それに心得て大きに恐れて奥へ逃入りしを御召出しありて物など賜はりけるとなむ。

今翁も此の老僧が接木する如く老朽ちぬれどもある限りは舊學をきはめて人にも傳へ書にも殘して後世に至りて正學の開くる端にもなり斯の道の爲に萬

死しても骨云々

其ノ言ノ後世ニ立
ツ、此ヲ之レ死シ
テ朽チズト謂フベ
シ。(國語)

かし

駁臺雜話

五卷、室鳩巢著、
學術・道徳に關す
る隨筆、寛延三年
(一七六〇)刊行。

一の助となりなば、翁死してなほ生ける如し。古人の所謂「死しても骨朽ちじ」といひしこそ思ひあたり侍れ。聊か我が身の爲に謀るにあらず。諸君も翁がこの意を信じ給へかし。

(駁臺雜話)

女子新國語讀本 新制版 卷一 終

國語假名遣表

わ・は

語の上でわ・はは互に紛れない。語の中と下とで紛れる。左の外ははと書く。

- あわ(泡・沫)
- みなわ(水沫)
- あわつ(周章)
- あわただし(倉皇)
- いひわけ(言分)
- のわけ(野分)
- おひわけ(追分)
- うらわ(浦回)
- しまわ(島回)
- かわく(乾・渴)
- くつわ(轡)
- はにわ(埴輪)
- くわの(慈姑)
- ことわざ(諺)
- しわざ(爲業)

ことわる(斷・理)

こわいろ(聲色)

こわだか(聲高)

こわね(聲音)

さわぐ(騒)

さわやか(爽)

しわ(皺)

しわし(吝)

すわる(坐)

たわし(束薬子)

たわむ(撓)

たわに(撓)

たわやか(嬋妍)

たわやめ(手弱女)

たわら(依)

はらわた(腸)

ひわ(鶻)

ゆわう(硫黄)

よわし(弱)

かよわし(弱)

いわし(鱒)

あ・い・ひ

語の上ではあ・いが互に紛れ、語の中と下とではあ・い・ひが互に紛れる。左の語の外はひと書く。

あ(井)

あげた(井桁)

あど(井戸)

あぜき(井堰)

あなか(田舎)

あ(居)

あざり(膝行)

かもあ(鴨居)

しきあ(闕)

くもあ(雲居)

くらあ(位)

しばあ(芝居)

とりあ(鳥居)

まどあ(團欒)

もとあ(基)

あ(猪・亥)

あ(猪)

あ(猪)

いぬあ(乾)

あ(胃)

あ(率)

ひきあ(率)

あ(藍)

くれなあ(紅)

あぢさあ(紫陽花)

くわあ(慈姑)

まあ(参)

あ(老)

あ(梅)

あ(報)

え・ゑ・へ

語の上ではえ・ゑが互に紛れ、語の中・下ではえ・ゑ・へが互に紛れる。左の語の外はへと書く

糸(繪) 糸がく(畫がく) 糸のぐ(繪具) 糸かき(畫工) とも糸(鞆繪・巴) 糸(餌) 糸ぼし(烏帽子) 糸む(笑) 糸がほ(笑顏) 糸くぼ(蟹) 糸つぼ(笑壺) 糸じ(衛士) 糸ふ(酔ふ) 糸ひとれ(醉客) 糸(聲) つく糸(杖) 糸(故) 糸(据) 糸ぶろ(据風呂) いし糸(礎) 糸(末)

す糸ひろ(末廣) 糸(木末・梢) 糸(飢・餓) 糸(植) う糸(植木) う糸こみ(前栽) 糸(智慧) 糸(兄) 糸と(兄弟) 糸の元(甲) ひの元(丙) つちの元(戊) かの元(庚) みづの元(壬) 糸(枝) 糸だ(枝) しづ元(下枝) 元(江) 入り元(入江) ふ元(笛) さざ元(蝶螺) 糸(映)

ゆふば元(夕映) も元(萌) も元(萌黄) み元(外見) は元(生) ひこば元(藥) い元(癒) あま元(甘) おび元(脅) おぼ元(覺) き元(消) きこ元(聞) こ元(越) こ元(肥) こ元(凍) さ元(牙) た元(絶) ひ元(冷) ふ元(殖) ぼ元(吠・吼) も元(燃) もだ元(悶)

を・お・ほ・ふ
 語の上ではを・おが互に紛れ、語の下中ではほ・をが紛れる。おは語の中下に用ひることはない。左の語の外は語の上ではお、中と下とはほと書く。

を(男・雄・夫・牝) をつと(夫) をとこ(男) めもと(夫婦) たけを(猛夫) ますらを(丈夫) をひ(甥・姪) ををし(雄雄) を(小) をとめ(少女) をち(伯父・叔父) をば(伯母・叔母) を(女) をみなへし(女郎花)

を(尾) をばな(尾花) を(緒) はなを(鼻緒) を(麻・苧) をけ(桶) をさ(箆) をか(岡・丘・陸) をかぼ(陸稻) をがむ(拜) をかし(可笑) をかす(犯) をぎ(狄) をこ(痴・愚) をこがまし(痴) をさ(長) をさなし(幼) をさむ(治修收藏納) をささ(大抵) をしどり(鴛鴦) をしふ(教) をしむ(惜)

をす(食・治) をち(遠) をちこち(遠近) をととひ(一昨日) をとし(一昨年) をとり(囚・媒鳥) をどる(踊・跳・躍) をの(斧) をのく(慄) をはる(終・卒・了) をり(檻) をり(居) をる(折) をしき(折敷) しまる(萎) しまり(葉) つづらをり(九十九折) をろち(大蛇) あを(青) あまがひ(蝶鈿・青貝) あまし・あまむ(青)

いさを・いさまし(功績) うを(魚) かつを(鱈) ひを(氷魚) しらうを(白魚) かをる(香薫) さを(竿・棹) しをん(紫菀) しをらし(可憐) しをる(萎) たをやか(嬋妍) たをやめ(手弱女) とを(十) ばせを(芭蕉) まます(申) みさま(操) みを(澤・水脈) みをつくし(澤標) やをら(徐)

あふひ(葵) あふぐ(仰) あふぐ(煽) あふぎ(扇) あふる(煽) あふみ(近江) とほたふみ(遠江) きのふ(昨日) けふ(今日) さふらふ(候) たふる(仆・倒) たふとし(貴) はふる(投) ふくろふ(梟)

じ・ち
 じ・ちは語の上・中・下どこにあつてもじに紛れる。左の語の外はじと書く。

ち(父) をち(伯父・叔父・小父) ちち(爺・祖父)

ふと書いてまをと發音する場合。

ち(路)

やまち(山路)
よみち(黄泉)
すち(筋)
うち(氏)
ひち(臂)
あち(味)
あちはひ(味)
あち(鱒)
いちらし
かち(梶)
かち(銀冶)
ひち(泥)
ふち(藤)
ふちはかま(藤袴)
こうち(麴)
くちら(鯨)
よちる(攀)
けちめ(區別)
ことち(琴柱)
ねち(螺旋)
ねち(拗)

あちさの(紫陽花)

ちちむ(縮)
なんち(汝)
もみち(紅葉)
わらち(草鞋)
なめくち(蛎螭)
みそち(三十)
よそち(四十)
いそち(五十)
むそち(六十)
ず・づ
ず・づは語の上・中・下どこにあつてもともに紛れる。左の語の外は、づと書く。

かず(數)

かならず(必)
きず(傷・疵・瑕)
くず(葛・國柘)
すず(鈴・錫)
すずき(鱸)
すずし・すずむ(涼)
すずしろ(蘿蔔)
すずな(菘)
すずめ(雀)
すずり(硯)
すずろ(漫)
すずむ(竹)
なすらふ(準)
ねずみ(鼠)
はず(管・弭)
やはず(矢筈)
ゆはず(弭)
はずみ(機)
ます(雜・交・混)
みみず(蚯蚓)
もず(百舌鳥・鵲)

さ行變格活用の濁れるもの。
禁ず信ず等

常用漢字

字

(大正十二年五月臨時國語調査會發表、昭和六年五月修正)(千八百五十八字)

【一】一丁七丈三上下不
世丙並
【丁】中
【丸】丸主
【乙】乙九乞也乳亂
【了】了事
【二】二五五井
【亡】亡交亦京亭
【人】人仁仇今介仕他付
代令以仰仲伴任伊伏伐
休伯伴仲伺似位低住佐
何余佳佛作使來例侍供
依侮候便係促俊俗保
俠信修俱俳俵俸倉個倍
倒候借偷併假偉偏停健

側偶傍傑備催傳債傷傾
僅働像僚偽僧價儀億儉
償優
【元】元兄充兆兇先光克
免免兒
【入】入丙全兩
【八】八公六共兵共具典
兼
【冊】冊再
【冗】冗
【凜】凜凜凜凜凜凜凜
【凡】凡
【凶】凶凶
【刀】刀刃分切刊刑列初
判別利到制刷券刺刻則
削前剛副剝割創劇劍劑

【力】力功加劣助努効勅
勇勉勤勸務勝勞募勢勸
勳勸勸
【包】包
【化】化北
【區】區
【十】十千升午半卑卒卓
協南博
【占】占
【印】印危却卵卷即
【厄】厄厘厚厚厭
【去】去參
【反】反友反叔取受
【古】古古句叫召可史右
司各合吉同名后吏吐向
君吟否舍呈吸吹告咸周

味呼命和咽哀品員哲唐
唯唱商問啓善喉喜喪喫
單嗣嘉器噴巖囁
【囚】囚四回困困固國圍
國圍圖圍
【土】土在地坂均坊坑坪
垂型埋城域執培基堀堂
堅堤堪報場塔塗塵境墓
塀增墨墮壁壇壓壤
【士】士壯登壽
【夏】夏
【夕】夕外多夜夢
【大】大天太夫央失奇奉
奏契奔奢輿奪獎奮
【女】女奴好如妃妊妥妙
妨妹妻姉始姑姓委姦姪

姪姻姿威娘娛娘娼婚婦
婿媒嫁嫡嫌嫌
【子】子字存孝季孤孫學
【宅】宅守安宏完宗官定
宜客宜室宮害安家容宿
寄密富寒察寢實審寫寬
寶
【寸】寸寺封射將專尉尊
尋對導
【小】小少尙
【尤】就
【尸】尺尼尾尿局居屈屈
屋展層履屬
【山】山岡岩岳岸峙峯島
峽崇崎崩
【川】川州巡巢
【工】工左巧互差
【已】已

【巾】市布帆希帝師席
帳帶常帽幅幕幣
【干】干平年幸幹
【幻】幻幼幾
【床】床序底店府度座庫
庭庶康廉廓廢廣廳
【延】延廷建廻
【弄】弄弊
【弋】弋式
【弓】弓弔引弟弱張強彈
【形】形影影彰
【役】役彼往征待律後徐
徑徒得從御復徵徵德徹
【心】心必忌忍志忘忙忠
快念怒思怠急性怨怪怯
恐恥恨恩恭息悔悟悖患
悲惟悼情惑惜惠惡情惱
想愁愉意愚愛感慈態慕

慘慢憤憤慨慮慰慶愆憂
憐憐愆憶憾憤懇應懲懷
懸戀
【戈】成我戒戰戲戴
【戶】戶屜房所扇
【手】手才打扱扶批承技
抑投抗折抱抵押披抽拂
拍拒拓拔拘拙招拜括拳
拾持指振捕捧描捨掃授
掌排掛採探控推揚接提
換握揮揭揮揮授損搖搜摘
携摩撫擇擊操擔據擬擴
攝
【支】支
【支】支
【支】收改攻放政故敍教
敏敢敗敢散敬敵敷數整
【文】文
【斗】斗料斜

【斤】斤斤斬新斷斯
【方】方施旋族族旗
【无】既
【日】日且旨早旬旭昇昌
明易昔星春昭昨是映時
晚晝普景晴晶智暇暖暗
暑暮暴曆曇曜
【曲】曲更書曹會替最會
【月】月有朋服朕朗望朝
期
【木】木未末本札朱机朽
杉材村東柿杯東松板枕
林枚果枝枯架柄某染柔
杏柩柱柳栗校株根格栽
桃案桐桑梅條梨棗棗棋
棒棟森棺植桶業極榮構
概樂樓標樞模樣樹橋機
橫檄檢櫻欄權

【欠】欠欲款欺歌歎歐歡
【止】止正此步武歲歷歸
【歹】歹死殊殉殖殘
【段】段殺毀毀
【母】母每毒
【比】比
【毛】毛
【氏】氏民
【氣】氣
【水】水水永汙求汗汚江
池決汽沈沒沖沙汰河沸
油治沼沿況泉泊法波泣
泥注泰泳洋洗津洪活派
流浦浪浮浴海浸消涉液
淑淚淡淨淫深混清淺添
滅淵渡溫測滯渴湖湧湯
源準溢溶溺滅滋滑滯滴
滿漁漂漆漏瀆漕漕漢漫

漸深滯湖澤激濁濃濕濟
濱瀧灣
【火】火灰災炊炎炭烈無
然煉煮煙照煩熱熱燃燈
燒營燔爐
【爪】爪爭爲爵
【父】父
【爻】兩
【片】片版牌
【牙】牙
【牛】牛牧物牲特犧
【犬】犬犯狀狂狩狹猛貓
猶獄獨獲獵獸
【玄】玄率
【玉】玉王玩珍珠班現球
理琴環璽
【瓦】瓦瓶
【甘】甘甚

【生】生產甥
【用】用
【田】田由甲中男町界畏
畑畜畝略番畫異雷雷疊
【疋】疋疎疑
【疋】疫疲疾病症痘痛痢
瘵瘵
【登】登發
【白】白百的皆皇
【皮】皮
【皿】皿盆益盛盜盟盡監
盤
【目】目盲直相省眉看眞
眼眼着睡昏
【矢】矢知短
【石】石砂砲破研硬硯碁
碎碑確磁磨礎
【示】示社祈祕祖祝神票

祭禁禍福禦禮
【禾】秀私秋科秒租秧移
稅程稚種稱稻稿穀積穗
繼
【穴】穴究空突窳窳窳窳
【立】立章童端鏡
【竹】竹竿笑笛符第筆等
筋筒答策算管箱節籠築
篤簡簿籍
【米】米粉粒粘粗粹精糲
糞
【糸】糸紀約紅紋約純紙
級紛素紉索紫累細紳緞
紺紵組結絕絡給統絲絹
經緯維網綉綉綉綉綉綉
線緯絳緇綉綉練練綉綉
縮綻總績繫績績績績績
繼績

【岳】缺
 【网】罪置署罰罵罷羅
 【羊】羊美羣義
 【羽】羽翁翌習翼
 【老】老考者
 【而】耐
 【采】耕
 【耳】耳聖聞聯聲職聽
 【聿】肅舉
 【肉】肉肖肝股肥肩育肺
 胃背胎胞胸能脅脈脊
 脚腕腐腕腦腰腸腹膚膜
 膝臆臆膺臆
 【巨】巨臥臨
 【自】自臭
 【至】至致臺
 【白】與興舉舊
 【舌】舌舍

【舛】舛
 【舟】舟航般舵舶船艦
 【良】良
 【色】色
 【艸】芝花芽芳苑苗若苦
 英茂茶草荒荷莊菊茵菓
 榮華萬落葉著葬蒙蒸蓄
 蔓薄藏藝藤藥
 【声】虎虐處虛號
 【虫】蚊蛇蛙蜂蜜融蟲蠶
 蠶
 【血】血衆
 【行】行術街衙衛
 【衣】衣表衰袋袖被裁裂
 裏裕補裝裸製複褒襲
 【西】西要覆
 【見】見規視親覺覽觀
 【角】角解觸

【言】言訂計討訓託記訟
 訪設許訴診詐詔評詞詠
 試詩詰話詳誇誌認誓誕
 誘語誠誤說課調談請論
 諭諸諾謀謁諮講謝語謹
 謬證識譜警譚議護譽讀
 變讓
 【谷】谷
 【豆】豆豐
 【豕】豚象豪豫
 【貝】貝貞負財貧貨販買
 責貯貳貴買貸費買賀貨
 賄資賊賓賜賞賢賣賤賦
 質賴購贈贊
 【赤】赤
 【走】走赴起超越
 【足】足距跡路踊躍
 【身】身

【車】車軌軍軒軟軸較載
 輕輦輪輯輸輿轉
 【辛】辛辨辭辯
 【辰】辰農
 【迄】迄迎近返迫迭迭迷
 追退迭迭逆逐途途速
 造連週進逸逸遇運過
 道達遠遙遞遠遠適適遲
 遷選選選選選選選選選
 【邑】邦邗邳邳邳邳邳
 都鄉
 【酉】酌配酒酢酬酷酸醉
 醜醫
 【采】釋
 【里】里重野量
 【金】金釜針鈞鈍鉛鉛鉢
 銀銃銅銘銳鋒鋼錯錄錢
 鍋鎖鎮鏡鑄鐘鐵鑑鐵

【長】長
 【門】門閉開閉開閉開閉
 【阜】防附降限陸院陣除
 陪陳陰陵陶陷陸陽陸隊
 階隔隙際隣隨險隱
 【隹】隹雀雄雅集履雌雙
 雜離難
 【雨】雨雪雲零雷電雷震
 霜霧露靈
 【青】青靜
 【非】非

【面】面
 【革】革靴
 【音】音響
 【頁】頁項頤頤頤頤頤頤
 頤頤頤頤頤頤頤頤頤
 【風】風
 【飛】飛麟
 【食】食飢飲飯飾養餓餘
 餅館餐
 【首】首
 【香】香

【馬】馬馳駁駈駐騎騰驤
 驅驗驚驛
 【骨】骨髓體
 【高】高
 【毛】髮
 【門】闕
 【鬼】鬼魂魔
 【魚】魚鮮鯉鯛
 【鳥】鳥鳩鳴鶴鷄
 【鹵】鹽
 【鹿】鹿麗

【麥】麥
 【麻】麻
 【黃】黃
 【黑】黑默點黛
 【鼓】鼓
 【鼻】鼻
 【齋】齋
 【齒】齒齡
 【龍】龍
 【龜】龜

注意

- (一) 本表にない漢字は假名で書くこと
- (二) 固有名詞には本表にない文字を用ひても差支ない、ただし外國(支那を除く)の人名地名は假名書とすること
- (三) 代名詞・副詞・接續詞・感動詞・助動詞および助詞はなるべく假名で書くこと
- (四) 外來語は假名で書くこと。

略字表

(臨時國語調査會發表)

左の字體を本位として用ひること。
(括弧内の小字は字典體)

勸(勸) 權(權) 灌(灌) 飲(飲) 觀(觀)
 沢(澤) 扒(擇) 訳(譯) 馱(驛) 积(釋)
 变(變) 恋(戀) 奩(奩) 湾(灣)
 莖(莖) 徑(徑) 經(經) 輕(輕)
 併(併) 塀(塀) 瓶(瓶) 餅(餅) 研(研)
 齊(齊) 齋(齋) 濟(濟) 劑(劑)
 残(殘) 淺(淺) 賤(賤) 錢(錢)
 勞(勞) 營(營) 榮(榮) 學(學) 覺(覺)

举(舉) 譽(譽) 斷(斷) 繼(繼)
 齒(齒) 齡(齡) 濕(濕) 頤(頤)
 窓(窓) 總(總) 属(屬) 囑(囑)
 為(爲) 偽(偽) 帶(帶) 滯(滯)
 參(參) 慘(慘) 兩(兩) 滿(滿)
 癸(癸) 廢(廢) 胤(胤) 獺(獺)
 乱(亂) 辭(辭) 潜(潛) 贊(贊)
 走(走) 徒(徒) 役(從) 縱(縱)
 惱(惱) 腦(腦) 処(處) 扱(據)
 担(擔) 胆(膽) 耒(來) 麥(麥)
 寿(壽) 鑄(鑄) 数(數) 樓(樓)

樂(樂) 葉(葉) 誦(讀) 続(續)
 竜(龍) 滝(瀧) 随(隨) 髓(髓)
 康(鹿) 麗(麗) 聽(聽) 廳(廳)
 虚(虚) 戲(戲) 遲(遲) 解(解)
 独(獨) 触(觸) 疊(疊) 撰(撰)
 虫(蟲) 蚤(蚤) 仮(假) 兎(兎)
 励(勵) 嘗(嘗) 国(國) 困(困)
 凹(凹) 囟(囟) 壺(壺) 実(實)
 写(寫) 宝(寶) 扣(控) 叙(敘)
 条(條) 様(様) 帰(歸) 気(氣)
 炉(爐) 樣(樣) 献(獻) 画(畫)

苗(苗) 尽(盡) 礼(禮) 称(稱)
 糸(絲) 欠(欠) 声(聲) 台(臺)
 旧(舊) 万(萬) 号(號) 証(證)
 豊(豊) 弁(辨) 通(遞) 辺(邊)
 医(醫) 鉄(鐵) 関(關) 双(雙)
 靈(靈) 余(餘) 館(館) 体(體)
 塩(鹽) 点(點) 覺(覺)
 鬪(鬪) 刺(刺) 龟(龜)

揅	扒	蟻	柵	鳴	駢	鱧	鱧	癢	鱗	笹	神	怵	怵	込		
しほる	しほる	しつけ	しきみ	しぎ	しかと	しいら	シ	さば	さしこみ	ささら	ささ	さかき	サ	こらへる	こらふ	こめ

峙	杣	纏	纏	瞭	躬	睽	亡	鮭	楫	鮭	癢			
たうげ	タ	そま	ソ	センチメートル	せん	せがれ	セ	すぬ	すべる	すばしり	すぎ	ス	しやく	しやちほこ

棲	辻	鳩	欄	問	問	母	狎	詭	衛	鱗	燧	禱	風		
つま	つじ	つぐみ	つき	つかへ	つかふ	つが	ツ	ちん	ちやう	ちどり	チ	たら	たつ	たすき	たこ

風	風	軻	迎	迎	鯨	柝	鶉	母	働	聡	糲	社	テ	
なぐ	なぎ	ナ	とも	とても	とて	どちやう	とち	とき	とが	どろ	ト	デカグラム	デカメートル	デシグラム

國
字
表

(下欄の読み方は歴史
的假名遣による)

鮠	鰯	鰈	鰯	鰯	鰯	鰯	鮫	適	鯛	ア		
うん	うん	うぐひ	ウ	いわし	いり	いすか	いさざ	いかるが	イ	あん	あつぱれ	あさり

鈔	鷲	鳩	糞	鯨	鵠	鵠	鵠	鵠	鵠	鵠	鵠	鵠	鵠
かさり	かけす	かかあ	かうぢ	かう	かいつぶり	カ	おろし	おもかげ	おほぼら	オ	えり	えそ	エ

鯨	杣	鴉	鯉	刈	袷	柰	栝	柰	柰	柰	柰	柰	柰	柰	柰	柰	柰	柰
きす	きこり	きくいだき	きぎ	キ	かる	かみしも	かへで	かつら	かせ	かせ	かすり	かすり	かすがひ	かすがひ	かしどり	かし		

込	込	楳	鞋	終	鮓	鯨	風	咖	俚	喰	糸	柵	籽	胚	
こむ	こみ	こまひ	こはぜ	このしろ	こち	こち	こがらし	こう	コ	くるま	くらふ	くぬぎ	ク	キログラム	キメートル

働	働	鱒	鱒	昌	昌	畑	裕	鱒	句	鳩	鱒	銚	餘	餅		
はたらく	はたらき	はたはた	はたはた	はたけ	はた	はた	はさま	はえ	ハ	にほふ	にほ	にしん	にえ	ニ	なまづ	なまづ

枅	枅	題	禁	銀	鯨	椽	鯨	扒	鯨	鈿	鈿	嘶			
ます	まさ	マ	ヘクトグラム	へ	ふもと	フ	びやう	ひがひ	ヒ	はんざう	はらか	はめる	はばき	はばき	はなし

瓜	枇	粃	奎	檜	笔	撈	耗	庭	鷹	猷	俣				
ヤ	もんめ	もみち	もみ	もく	モ	むろ	むしる	むしる	ム	ミリメートル	ミリグラム	ミ	まろ	まて	また

絨	粹	衍	鐘	聽	
をどし	ヲ	わく	ワ	ユ	やがて

(略名) 修文澤瀉女國

昭和十二年八月二十五日印刷
 昭和十三年一月二十二日再版
 昭和十三年七月十三日再版
 昭和十六年七月十二日再版



發行所

編者 澤瀉久孝
 發行者 中等學校教科書株式會社
 代表者 山本慶治
 東京市麴町區飯田町二丁目二十番地
 印刷者 交進社印刷所
 代表社員 余部留吉
 會社名 交進社
 東京市麴町區飯田町二丁目二十番地
 中等學校教科書株式會社
 日本出版文化協會會員番號 一一七五二二

女子新國語讀本 (新制版)
 定價 各金六拾錢

配給元 日本出版配給株式會社
 東京市神田區淡路町2ノ9

